
チャック全開ですよ

雨月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

チャック全開ですよ

【Nコード】

N4875X

【作者名】

雨月

【あらすじ】

憧れの生徒会長に告白し、成功をおさめた新戸風太郎。しかし、その日の放課後、クラスのアイドルに告白されうやむやな関係になる。彼は無事に高校生活を送れるのだろうか。

第一話：人生の分岐点

第一話

俺、新戸風太郎は中学生の頃から一学年上の先輩の事が好きだった。しかし、恥じらう乙女のごとき心境でなかなか告白できず、気が付いてみれば高校二年生。先輩を追っかけて入った高校の入学式では先輩は既に生徒会長をやっており、先輩にあこがれている男子生徒は掃いて捨てるほどいた。

俺が二年になったと言う事は先輩が留年でもしない限り三年生になり、時期卒業するのだ。先輩が留年する事もなく、四月の二週目の昼休みとなった。

「おい、顔色悪いぜ？」

「……これから人生の分岐点に行つて来るだけだ」

俺はとうとう先輩を校舎裏に呼び出して告白した。そこらのへたれとは違うのだ。

「そうか、新戸は私の事が好きだったんだな……うん、いいぞ」

先輩と俺のめくるめくバラ色の高校生活が始まるのだとその時は信じて疑わなかった。もちろん、すれ違いや些細なことでの喧嘩、仲良くなる下校時の出来事等、酸いも甘いも体験していくんだろうなと思つていたその矢先、正確に言うなら先輩に告白してオーケーしてもらつたその日の放課後の事だった。

自分の下駄箱の中に都市伝説が何かと思われていたラブレターなるものが入つていたのである。内容は俺の事が入学時から気になつていた事、今日の放課後に裏庭に来てほしい事が書かれていた。きつとこれは知り合いの悪戯であろう、そう思つて俺は無視するこ

とに決めた。だが、何故かクラスメートが俺の前に立ちふさがる。

「おいおい、帰っちゃうと大変なことになるぞ」

「どうせお前が書いたんだろうが。俺にはお見通しなんだよ……こんな繊細で乙女っぽい字はお前か、クラスのアイドルの中原美奈子さんだけだ」

「そう、中原美奈子さんからのお手紙だ。いけ、行ってお前の幸せを掴んでくるんだっ」

熱血入った声でそう言われて俺は裏庭まで連行されていった。

無理やり押され、俺は下を向いて待つていた中原美奈子さんの前にふらつきながら登場。彼女は俺を見ると初めて見るような照れた仕草をしていた。普段は物事をはっきり言うような委員長タイプな人だけだな。

「ご、ごめんね、いきなりあんな手紙出しちゃって…迷惑だったよね？」

生徒会長に告白をし、見事玉砕していたのならひざまずいて『ありがとう、あなたこそ私のメシアです』とのたまっていた事だろうか。

「ちょっとだけ…めいわ…」

「ごめん、本当……」

すっごく暗い表情に早変わり。なんだか罪悪感で胸がいつぱいになった。

「あー、いやいや。その、さ、ほら、俺って帰宅部じゃん？だから急いで帰ろうかなあって思った時に靴の上に手紙が置いてあったから一生一度もらえるかどうかもわからないような手紙がくしゃくしゃになっちゃうかもしれないって意味で迷惑って言ったの。うん、直接渡してくれればよかったかなー、なんてね…あ、あははは…自分で何言っているのかわからないやー」

「そっか、よかったあ…」

心の底からよかったあという表情を見せてくれている。

「そ、それでね、その、手紙に書いていたんだけど…あたし、新戸

君の事が好きなんだ」

「え、あ、あ、そうなんだ。はは、もらった喜びで頭がいっぱいでよく読んでなかったよ……具体的にはどういう事が書いていたのかなあ」

「単刀直入に言うね、あたしと付き合って欲しいの」

この問いかけにうんとか応えると何だかすごく大変なことになる気がするのだ。いや、気がするんじゃないかってこれは二股と言う奴だろう。ばれたら大変どころか、想像に絶する事が起こるに違いない。当然と言うか、断るしかないだろう。

「ごめ……」

「駄目なの？」

「俺にはか……」

ぶわつと目に涙がすごい勢いで溜まって行く。去年、他校の不良生徒数人を相手取ってなお説教をし、勝利をつかみ取った女の子が一切見せなかった涙を初めて見てしまった。

「俺には力……ンボジア帰りのおじさんの相手をしないから今日はちよつと急いで帰らないといけないんだ……すごく、ありがたい申し出なんだけど、その……嬉しいけど恥ずかしいからさ、友達からじゃ駄目かな？」

「そう、だよ。うん、いきなり付き合ってくださいとかおかしいもんね。うん、新戸君がそのほうがいいって言うのならそれでいいよ。驚かしちゃってごめんね」

「はは、いいよ。俺もなんだか混乱しちゃって変な事を口走ってごめんね」

これなら俺は二股かけたことにはならず、世間的にも言って恋人と親しい友人が出来たと言うだけだ。

しかし、問題が一つある。俺に告白してきた女の子は中原美奈子。俺が告白した生徒会長の名前は加賀美美奈子なのだ。ま、まあ、恋人と友達だしな。ニュアンスを間違えたりはしないだろう。

こうして俺の高校二年生は少し雲行き怪しく始まったのだった。

第二話：愛の詰まったお弁当

第二話

澄み切った青空はきつと青春を謳歌している連中の為にあるんだろ。憧れの先輩に告白し、彼氏彼女な関係となった俺だってその青春を謳歌している人間の種類に入るんじゃないだろうか。告白した、された次の日というのはもつと晴れやかでもないと思うんだけどな。

「っはあ〜……」

「おい、新戸〜そっちにボールがいったぞー」

飛んできた言葉も右から左に抜けて行って俺の心は全く晴れない。たとえ、視界に白球が入ってきててもそれは俺を素通り……

「いたっ……」

することもなく、俺は鼻っ面に当たった白球で見事に転倒した。転倒するはずがないって？がけつぷちで小学生のタックルを不意打ちで喰らってみればいいさ。

「やつりー、新戸のエラーだねっ」

「てめえ、なんでお前がここにいるんだよっ」

四月の体育、ソフトボール。先ほどの白球はどうやらクラスメートの田畑焰の放ったボールだったらしい。俺の名前も大概変だと言われるが、焰ヒヤヒヤなんて名前つける親の顔が見てみたい。

「いいじゃないの、ソフト。みんなでやったらなお楽しいよ」

バットを乱暴に振り回しながら素人くさいスイングを続ける。ランニングホームランとなったようでイライラした俺は田畑に向かってボールを投げてやった。

かきーん……ごすっ。

「……………」

「あ、ご、ごめーん。わざとじゃないんだよ」

悪い事はしちゃ駄目だね、しちゃったら後でひどい事が怒るんだよ…ぐすん。

そんなこんなでお昼休み。お腹の減った高校生にはこの時間が一番うれしいもので早速お弁当を取り出そうとするも、無い。

「新戸君、どうしたのですか？」

坊ちゃん刈りにぐるぐる眼鏡のクラスメートが話しかけてくる。

俺としては生徒Aでも構わんが、名前は中州秀作という。それなりに頭がよく、それなりに人が良く、運動が出来ないが彼女（モニタ）から出てきてくれないのが悩みらしい）がいる少年である。

「俺の弁当が無いんだよ。もしかして中州が食べたのか？」

「食べるわけありませんよ」

「そっだよなあ…」

購買には今から行ってもパンとか残ってないし、外のコンビニに買いに行くには外出許可申請とか面倒な事をしないといけないし…どうしたもんだろうか。

「あれ、どうしたの？」

そんな時、中原美奈子さんが俺に声をかけてくれたのだった。

「新戸君のお弁当が消えたらしいのです」

「そっか、大変だね」

「うん、大変だ。しょうがないから中州達からちよつとずつおかずをもらってしのごうかなあって思ってるところだよ」

「はい、これ」

凹んでいた俺に差し出されたのは可愛いハンカチーフで包まれた俺にとっては小さなお弁当箱だった。

「えーと、これは？」

「お弁当だよつ。新戸君、ううん、風太郎君の為に作ってきたんだよ。こんな言い方したら悪いけどお弁当が無いのなら食べてもらえ

るよね」

「そりやもう、心の底から感謝するよ」

もしかしてこの娘っ子は俺の事を好きなんじゃなかるうか……いや、そういや昨日告白されたばかりだったな。

ともかく、俺は急場をしのぐ事が出来たと言っわけだ。感謝感謝、中原さんには足を向けて寝れないな。

「本当は二人で食べたいんだけどこの後用事があるからごめんね」

「ああ、いや気にしないでいいよ。弁当ありがとう」

さっそうと出ていった中原さんを拝みながら俺は弁当のかわいらしい包みを広げる。

「ははあ、まさか二人がそういう関係だったとは……でも新戸君、昨日生徒会長を呼び出していませんでしたか？って、結果はわかりきってますね。ごめんなさい」

勝手に勘違いしてくれた中州のことなんて放っておくことにした。別に友達から弁当をもらったただけだ、なんら問題はない。たとえそれが手作り弁当だったとしても、ご飯にハートが作られていたとしてもだ。

「おお、新戸よかったじゃないか」

田畑がこっちに机をくつつけてくるのを足で妨害しながら反論する。

「俺の弁当が無いから仕方がないだろう」

「そっかそっか、うんうん…ほほえましいなあ」

あははと笑う田畑にこっちは心の中で色々と苦しんでるんだぞと言ってやりたかった。しかし、俺の弁当箱はどこに行っってしまったんだろう。

第三話：嵌められた風太郎

第三話

四月ももう終わりの最後の週、木曜日。放課後になって放送が鳴りだした。

『ピンポンパーンポーン………二年A組新戸風太郎、至急生徒会室前まで来なさい………ピンポンパーンポーン』

何故か『ピンポンパーンポーン』の部分が生徒会長の声だった。気がするまい。

「新戸、今度は何したの？」

「おい、やめろよ。それじゃ俺がいつも何かしでかしているようじゃないか」

「実際そうだと思うけどなあ」

「一年生の時は学期中に一度は大きな事件を起こしていましたよ」

「そ、そうだったか？忘れちまったなあ………ともかく、行って来る」

これ以上此処にいても過去の傷をいじられるだけだろうからな。

恋人らしいことなんて先輩とはほとんど何もしていないし、甘い期待なんて持たずに行つたほうがよさそうだな。そりゃあ、生徒会室での密会（既に全校生徒に知れ渡っているが）なんてすばらしい話だけだな。

「実はな、女子生徒からの報告があつて二階の渡り廊下の通風孔奥から異音が聞こえているそうだ。これから私と新戸で調べに行こうと思う」

「了解しました」

ま、やっぱりこういう事になるんだろうな。

渡り廊下は旧校舎とつながっており、人もそれなりに通る。通風孔は人が四つん這いになれば何とか通れるほどの大きさでいたずら防止のために特殊なネジで固定されているのだ。

やたら手慣れた手つきでネジを外し、自ら先に入りこむ。

「新戸、続けてきてくれ」

「わかりました」

こうやって先輩と一緒に何かの作業をしていると中学時代を思い出すな。

「新戸、裏庭の草取りに行こう」

「新戸、花壇に新しい花の種をまこう」

「新戸、職員室の掃除を頼まれた」

おかげで俺は先輩が卒業した後生徒会長に任命されましたけどね。夕焼け、それなりの暗さの通風孔。じめじめとしたようなことはなく、手のひら、膝頭には少しだけ冷たい感じを受けるだけだ。そして、俺の視界いっぱいに広がるのは先輩のお尻。役得である。

「ここは他のところにつながっているとは聞いていないから、きつと途中でフィンがあるんだろう」

「そうですね」

「ああ、特に異常が見られなかったら今のままの状態で戻らないといけないからな」

つまり、先輩のお尻が迫り来るなかバックで出ないといけないってことか。それはそれでいいんだけどね。

ぼーっとしていたのが悪かったのか、先輩のお尻に顔をうずめてしまった。

「うわっぶ」

「……行き止まりだ。新戸、壊れたファンがあるくらいだから戻ろう」

「ふえーい」

もうちょい先輩の尻に顔をうずめておけばよかったかなと思いつつ、バックで戻ることにした。光が差し込んでるところまで戻り、

気が付く。

「あれ、閉められちゃってますよ」

「何？本当か？」

「はい」

足で何度か蹴っても開く様子はない。去年、馬鹿力の生徒が此処を開けようと力づくでやっていたようだが、開いたところは見たこともない。

「で、どうしましょうか」

先輩の尻を眺めつつのんきにそういう。先輩に任しておけば大丈夫だろうからな。

「……そうだな、先に進むうか」

さっきは行き止まりだと言っていた。しかし、先輩の事だろうから何か考えがあるのだろう。

先ほどの場所にやってきてても今度は先輩のお尻に顔を埋めることなく、先輩が奥の方で立ち上がった。どうやら奥は立てるほどの広さがあるらしい。

「そのまま這って私の両足の間から頭を出し、肩車してくれ」

「わかりました。先輩はどうするんですか？」

「壊れたファンを外して外に出る」

その向こう側は外とつながっているようだ。こういった行動力に惹かれて告白したのもあるからな。ともかく、今は先輩に従っておこう。

先輩の股の部分から顔を出すと言う日常では殆どあり得ないイベントを楽しむ事もなく、俺は先輩を上に乗し上げる。

「届きそうですか？」

「いや、無理だ。これから新戸の肩に足を置いて壁をつたって昇る。私が落ちたら支えてくれ」

こんな狭いところで落ちてきても支えられるんだろうか。でもまあ、先輩が落ちるなんて事は絶対にはずである。

さて、俺らはちよっとした緊急事態に陥っているわけだ。先輩の

両足は今や俺の両肩に乗っている。つまり、俺が九十度上を見ると何が見える状態だと思う？

「ずばり、先輩のパンツが見えるはずだ。」

そして、そんなちよつとエツチな事しても誰にも気づかれることなんてないのだ。だって此処には先輩と俺だけしかないのだから。

「よし、すぐに下を開けてやるからな。」

結局、俺は上を見なかった。そして先輩は昇って行って外に脱出できたようだった。俺もこのまま続いてもいいけどせっかく先輩があけてくれるんだからそつちで待っておけばいいだろう。

先輩が脱出して十分が経過。

「先輩遅いな。」

目の前の鉄格子を揺らしてみるのが、効果なし。気分は動物園の猿である。あ、猿は猿山だからゴリラあたりだろうか？

「あれ、新戸何してるの？」

そんな時、俺の目の前に田畑がやってきた。シュノーケルにランドセル、おまるを片手に持っていると言う違和感ありまくり…しかし、突っ込んでいる場合でもない。

「田畑：いい所に来たな。ちよつとこれ使って俺を助けてくれよ」
中から届かない為、工具があつても意味がない。俺はそれを外に放り出した。

「えー、どうしよつかない。」

そして工具を手にとってにやにやとした笑みを浮かべる田畑。気のせいかな、手に持っているおまるの面もそれに似ているようだった。

「頼む」

「へえ、それが人に物を頼む態度なのかなあ？」

くっ、相変わらず嫌な性格してやがる。

「お願いします」

「助けてあげたら何してくれるの？」

「な、何か一つ言う事聞いてやるよ」

「そっかそっか、それはいい事を聞いたよ」

数分後、田畑に助け出してもらって俺は何とか脱出する事が出来たのだった。

「いやー、今度の日曜日が楽しみだよ。朝から晩までスケジュール白紙にしておいてよ」

そっいいながら田畑は去って行き、今度の日曜日はばっくれてやるうかと思ったりする。

「しかし、先輩はどこに行っちゃったんだ？」

仮にも俺って先輩の彼氏なのに……ここまで助けに来るのが遅いなんて何かあったのだろうか。

「……ともかく携帯も鞆の中だし教室に戻ってみるか」

「新戸」

先輩の声が聞こえてきた。珍しく焦っているようだ。

「あ、先輩」

「悪い、いいわけだが生徒につかまってしまっただけでなかなか開放してもらえなかったんだ」

「いいですよ。こっちは何とかかりましたから」

「それで、今度の日曜日償いをさせてもらいたいんだがどうだ？」

「あ、すみません。その日ちょっと友達と用事があるんで無理です」

「そ、そうか」

まるで神様が俺と先輩の中を引き裂こうとしているかのように予定が合わなかった。結局、先輩はその後もう事があったようで俺は一人空しく帰路についた。

第四話：妹分、愛夏

第四話

田畑焰と約束した日曜日の朝。携帯電話が鳴りだしたので寝ぼけ眼で探して耳に当てる。寝起きの悪い俺としては実にすばらしい反応である。

「……………もしもし？」

『おつはよー、昨日はよく眠れたかな？』

「……………ぐつすりだよ、お前に起こされて不機嫌だ」

『そっかそっかー、じゃあ十一時にデパート前集合ね。じゃあね〜』
一方的に電話は切られ（いや、別に長電話したいわけでもないが）、俺は身体を起こす。

「……………せつかくの休日、例えば先輩から誘われたと言っのにこっちを優先してしまうなんて俺はなんて律儀な人間なんだろうか」

某青狸の『半分小刀』があれば両方に行けたんだけどなあ〜テクノロジーの進歩と言う奴はローマの一步みたいでまだまだ先のようにである。

自室から出て顔を洗い、一階へと降りる。テクノロジーの進歩があれば階段も自動になって…いや、瞬間移動でいけるか。

「風太郎、愛夏ちゃんが来てるわよ」

「おはよっ、兄貴」

リビングには母さんと親戚の愛夏がいた。休日だと言っのに愛夏は制服姿である。新戸愛夏、結構遠い親せきにあたるんだが、幼少のころから住んでいる地域が同じなために小、中、そして高校共に一緒である。兄弟のいない俺の妹分だ。ちなみに、子分とかそんな感じではなく妹分（貴重な俺の妹成分）である。意味がわからない？つまりは心のよりどころみたいなもんだ。

「あれ、今日は休みだろ？」

「うん、そうだけど兄貴に制服姿を見せたかったんだよ」

じゃーんとか言ってくるりと一回転。スカートがひらひらなって可愛い。さすが俺の妹分である。

「制服姿って、入学式と一緒に写真撮っただろ？」

「違うよ、同じ学校なのに兄貴が会いに来てくれないからしっかり見てもらうために来たんだよ。なんで会いに来てくれないの？」

「そりゃまあ、用事もないのに一年の教室には行けないだろ」

えー、ちゃんと愛夏に会うためって言う用事があるじゃん……なんて言われる前に俺は口を開く。

「お前が会いに来ればいいじゃないか」

「あ、そうか」

来てもらっても困るんだけどな。おもちゃを見つけたら絶対に喜ぶような奴が約一名、俺の近くにいます。ともかく、この場をやり過ぎたからよしとしよう。

「母さんちよつと買い物に行って来るから」

「いつてらっしやーい」

「母さん、シャンプーと歯磨き粉が無くなりそうだからよろしく」

二人で母さんを見送って俺は席に着く。

「朝まだだよね？」

「ああ」

「何か作ってあげようか？」

「頼むよ」

「りょーかい」

台所に立つ愛夏を尻目に俺はテレビのスイッチを入れる。

「そつえばさ、兄貴……とうとう加賀美生徒会長に告白して、しかも成功したんだよね？」

「ああ、何とかな」

「よかつたじゃん。妹分の愛夏としてはふられるほうに賭けてたんだけど残念だったよ」

「そこは嘘でもいいから成功する方に賭けてくれよ」

偉い政治家さん達が色々と議論している。俺からしてみればどう

せどつかと癒着とかしてるんだろつと思うが、自分がもしも政治家になれた時に癒着とかを話題に持って来られるとテレビの中の政治家と同じで文句を言う事間違いないだろう。

「でもなあ、ちよつと問題があるんだ」

「どうかしたの？」

「告白したその日に中原美奈子つて言うクラスメートに告白された」
「当然断つたんだよね？」

「そうだよ、世間一般的に言つて普通ははつきりと断るだろう。」

「あゝ………適当に『友達からお願ひします』つてうやむやにしておいた」

「がたん、という音が聞こえてきて俺の目の前に裏返された目玉焼きが綺麗に着地した。まあ、黄なみがつぶれちゃったけどな。」

「愛夏、いつの間にかこんなにごいスキルを身に付けたんだな。」

「お兄ちゃん、感心しちゃったわあゝ」

「血相変えた愛夏がこけそうになりながら俺の視界に入ってくる。」

「あ、兄貴つ、それはまずいと思うよつ」

「エプロン姿が可愛い愛夏が俺の前の席に座つて失敗した目玉焼きを片づけた。」

「………やつぱりまずいか？」

「そりゃそうだよつ………ばれたりしてないよね？」

「大丈夫だ。どっちにもばれたりしてないから」

「しばらく愛夏は考えているようだった。」

「どうするの？」

「どうするつて、いや、どうにもできないから愛夏に相談してみたんだ」

「兄貴つてば変な事をよく引き起こすよねえ。去年は下着泥棒に間違えられて女子から総スカン喰らつたんだつて？」

「あれは冤罪だけだな。後日ちゃんと謝つてもらつたぞ」

「愛夏は未だ考えているようだった。」

「もつ、あれだよ。どうせ加賀美生徒会長も兄貴の事を知り合いだ」

から断つたら関係悪化しちゃうそうだし、仕方なく付き合っただけ
てるのかもよ」

「そ、そうかなあ」

「うーん、でも、そのクラスメートの中原美奈子って人もこれと言
って取り柄のない兄貴に魅力を感じてるのかなあ……」

「おいおい、取り柄のないって……」

「じゃあどんな感じで告白されたの？」

愛夏に言われて思い出そうと頑張ってみる。

「好きだから付き合っただけってほしって感じかなあ……」

「怪しい……もしかしたら兄貴の遺産が目当てなのかも」

「俺の家は別に裕福でもないだろ」

「いや、もしかしたら兄貴に秘めたる能力があってそれが目的で……」

「はいはい、愛夏、さっさと朝食作ってくれよ」

「はい」

いまいち真面目にやってくれないのは俺の性格が似てしまったか
らだろうか。

「でもさあ、どうするの？」

「どうするのって、そりゃやっぱ先輩優先だろ。いつかちゃんと
言わないといけないことだ」

セリフだけだと格好いいけどやってる事は最低だよねえと言われ
た。確かにそうだけども、優柔不断な自分が悲しいぜ。

「兄貴がそれでいいって言うのなら愛夏も何か手伝っよ」

「おう、その時はよろしく頼む」

これまで困った時に愛夏が助けてくれると大抵失敗に終わる。し
かし、くじけてはいけない。数多くの失敗を乗り越えて成功と言っ
ものは顔を出してくれるのである。

第五話：田畑との友情

第五話

田畑との待ち合わせ場所に十分前到着完了。

「や、新戸」

「お前にしちゃ早かったな」

「そりゃそうだよ。だって家の前集合に変えたんだからさ」

昼飯を取っているときにメールが来た。『集合場所はあたしの自宅に変更』という内容である。

「しつつかし、相変わらずおしゃれさんだな」

「身なりはちゃんとしてないと駄目なんだよ」

Tシャツジーンパンの俺とはだいぶ違う。男っぽい見た目の服装の為に女子に人気の田畑。これは噂だが、男子の中で彼女を盗られた奴がいるとかいないとか……。

「で、俺は何をすればいいんだよ」

「実に簡単なことだよ」

こいつの簡単は九十超えるおばあちゃんが逆立ち町内一周をするぐらいの難易度である。

「さっさと内容言ってくれよ」

「それは着くまでのお楽しみだからね」

あゝあ、どんな事が起こるかもわからないのに安易に助けを求めたのが失敗だったな。あとちょっと待っていれば先輩が助けに来てくれて今頃デートしているはずだったのに。

デパートについて俺と田畑が向かった先は女性用下着売り場。何、田畑だって身なりは男っぽいのが脱がせば女子である。ブラにばんちくは必要だろう。ちなみに俺一人がこの売り場に入ると女性店員から変な顔をされること間違いなし。この前なんてアマチュア作家の人が店員さんに連れて行かれていたからな。

「いや、違うんです。俺は別にそういう目的で来たわけでは……」

小説に使うネタですよ」

あれは可哀想だったな。同じ男として合掌しておいた。

「で、此处で何するんだよ？」

「決まってるよ」

びしつと右手で指差してくる。

「下着を買ってきてもらうんだっ」

「……はあ？あんな、俺が買いに行ったら連行されるぞ」

「そこは大丈夫、ここにあたしがいるからさ」

にこやかにそう言われる。そして親指立てて俺に言うのだった。

「がんばっ」

「ちっ、しょうがねえな」

足取り重く、店員さんに目をつけられない様に手近な下着を手取る。

「上下セットで頼むよ」

「へいへい」

サイズは適当でいいのか？ブラジャーとか付けたことなんて一回もないからわからんぞ。知り合いの中に標準的な人物がいるかどうか……愛夏は胸ないしなあ、先輩は結構あるし、そっいえば俺は女子と一緒に来ているんだからそいつに買えって言われているんだから基準をそいつにすればいいな。

じーっと田畑の方を見る。

「何、どうしたのさ？」

にやにやしているところを見ると俺がなんで田畑の事を見ているのかわかっている節である。

「……すまん、田畑」

「失礼だよ」

「すまん、すまん……」

愛夏と変わらないくらいだった……ええい、こつなったら適当に上下セットで買えばいいはずだ。

男らしくブラジャーを掴み、パンツもついでにあさる。

「あれ、風太郎君？」

どこかで聞いたことあるような声が耳に入ってきた。回らぬ首を無理やり回して声の主を視界にとらえる。

「な、中原さん……」

「……なんで風太郎君がブラジャー驚掴みしてるの？」

「こういう時、変に緊張したりしてはいけない。いつもと同じようにふるまえばいいのだ。」

「田畑に頼まれたんだよ。下着上下セット買ってさ……あれ、いねえ」

「田畑さんに？」

「ああ、諸々あっていわば罰ゲームってやつかな。でも、いなくなつたし戻してもいいだろ……」

「あの～お客様」

「はい？」

遂にきたか……連行されたらどうなるんだろう。

「さすがにそこまで力強く握られたものを返されては困ります」

「え、あ、ああ……すみません。これ、買いますから」

愛想笑いを浮かべながらレジまで持つていく。もちろん、ぱんちも買ったさ。ああ、着用しない女性用下着をそれはもう堂々と買ってやった。

「ママ、なんで男の人なのにぶらじゃー買ってるの？」

「よく見ておきなさい。あれが変態予備軍よ」

もう二度とこのデパートには来れないやと思いつつお金を払う。

それなりに高かった……でもまあ、中原さんが近くに来てくれたおかげで精神的に楽だった。

その後、逃げるようにその場を後にしてデパート内の飲食店に入る。本格的なコーヒーのあのお店である。

「それでその下着どうするの？風太郎君がつけるの？」

「まさか、つけるわけないよ」

「じゃあそれ、あたしにくれなないかな？」

愛夏にでも上げようかと思ったが、このサイズじゃちょっと愛夏には大きいしなあ。

「いいよ。あげる」

「お金、払おうか？」

「いや、いい。はいどうぞ」

紙袋を中原さんに渡してため息をつく。

「しっかし、田畑のやるゝどこに行ったんだろ」

「きつと急に用事が出来たんだよ」

「そうかなあ」

「だと思っよ」

本当にそうなんだろうか、でもないんだからその通りなんだろうな。後で聞いておくとしよう。

「この後暇なら一緒にカラオケでも行かない？」

「いいよ」

結局、この後中原さんと休日を過ごしたわけだ。悪くはなかったし、女の子とデートなんてラッキーだなと思ったさ。でもさ、やっぱり先輩とデートしたかった。

第六話：日常風景となった事

第六話

先輩と俺が恋人関係になって一カ月が経った。特に報告するような進展はなく（眼と眼があった、手と手が触れたとかそんなの）、たまに俺が先輩の仕事を手伝うくらいだ。変わった事と言えば夏服との衣替えが始まったのと、中間試験がそろそろ迫ってきているくらいか。

「はい、風太郎君お弁当」

「ああ、ありがとう」

撤回していく中原さんに手を振っていると田畑が顔を近づけてくる。

「日常風景になったねえー」

「そーだな」

最初の頃はちょっと悪いかなど思ったんだけど、最近じゃ何とも思わなくなってきたりする。ちょっとやばいか？いや、別に彼女ってわけじゃないんだし、何かあったと言っわけでもない。

「新戸君、今日の日直ですから早く黒板消してください」

「わかつてるよ。飯食った後じゃないと粉が飛ぶだろ」

「ちゃんと消しておけばよかったです」

中州に文句を言われつつ机をくつつける。

「そーだよ、全部新戸が悪いに違いない」

「…お前も一応日直なんだぜ」

「大丈夫、あたしはちゃんと職務を果たしたから」

「はあ？」

「学校に来た、それが日直の仕事」

「……」

こいつに何を言っても無駄だな。

弁当箱を開けようとすると、もうひとつ机を引っ張ってくる人物

がいた。

「あたしもお邪魔します」

「中原さん……」

「一緒に食べようと思ってさ。やっぱり、食べてる人の顔もみたいかなーって思ってた……駄目、かな？」

「ちょっとおどおどした感じがいつもと違う。」

「中州君っ」

「はい？」

「わたしたちは邪魔だから、別のグループのお世話になるっ」

「そうですっね」

教室と言う小宇宙の中で作られた宇宙ステーションはあつという間に解体、独立して別の場所へと移って行く。俺は取り残されてしまった。

「ごめんね」

「気にしなくていいって」

「うん、じゃあ気にしない」

俺の真正面に（どうでもいい事だが目の前はいつも田畑）陣取る。ぼーっとしているのもあれなのでお弁当箱を開けた。

「あれ、今日は箸が入ってないよ」

「え？あ、あ……ごめん。忘れちゃったみたい」

中原さんが忘れることなんて珍しい事もあるんだなあ。箸が無いのならちよつと遠いけど食堂まで行けば借りてこられるからな。

「あ、ちよつと待って」

立ち上がった俺の腕を中原さんが掴む。

「どうしたのさ」

「えつとさ……えーつと、この前田畑さんがお弁当忘れてた事あったでしょ？」

「ああ」

約一週間前に田畑はお弁当を忘れ（さらに財布も忘れていた）、俺と中州から昼食を分けてもらったのである。

「あつたな。それがどうかしたのか？」

「うん、風太郎君がお箸で食べさせてあげてたよね、だからあたしが食べさせてあげるよ」

「え、あ、いや……」

一週間前、田畑の奴は弁当のふたの裏におかれたおかずをじーつと見ており、俺に目で何かを訴えていた。

「どうした、それだけあれば充分だろ？」

「うん、じゃあどうやってあたしは食べればいいのか？」

「そりゃ箸借りてくればいいだろ」

「面倒だよ。新戸く食べさせてよ」

「……しょうがねえなあ」

何だか犬に餌をあげている気分になった。

ともかく、あれはもらっている側としてはすごくはすかしいのではないだろうか。

「いや、やっぱり恥ずかしいって」

「でも、あげてるときはまんざらでもない顔をしてたよ？」

「そりゃ、やっている方は何ともないだろ？」

「じゃあ、はい」

手渡されたのは箸だった。

「風太郎君があたしに食べさせてくれればいいんだよ」

「……なるほど」

さすがクラス委員長も務める中原美奈子さんである。その考えにはいたらなかった。

「あれ、いいんだ？」

「ああ、これなら別に恥ずかしくもないからな」

小さい頃は愛夏によくこうやって食べさせてやっていたもんだ。好奇心丸出しで周りが俺達の事を見て来たんだが、そんなにおかしい事をしていただろうか？

「ふう、ごちそうさま」

「御馳走様、弁当にお箸、ありがとう」

「いえいえ、風太郎君に喜んでもらうためにもっとお料理頑張るね」
面と向かってそう言われると恥ずかしい。いや、悪い気はしない
んだけどな。しかし、ずっと弁当を作ってきてもらうのもいけない
だろ。

先輩と俺は恋人で、中原さんとは友達のはずなのにやっている事
はまるで恋人みたいなことである。それとも、世間一般的な友達関
係ってこんな感じなのだろうか。

第七話：広がる事実

第七話

中間テストが始まり、すぐに終わった。それ以上でも以下でもない、勉強しているものはそれなりの点数を手に入れ…

「まずまずです」

「相変わらず安定して満点揃えてるな」

「ええ、努力の賜物です。次回も頑張らなくてはいけません」

勉強もせず、友人を無理やり誘って遊びに行くような愚か者にはそれ相応の点数を授けるいわば通過儀礼…

「ええ〜なんで新戸は一つも真つ赤な点数とってないのっ」

「そりゃまあ、お前と違ってちゃんと勉強しているからな」

「だって、一緒に遊んでたじゃん」

「家に帰ってちゃんと勉強したんだぜ？くくく、まあ、期末で頑張る事だな。じゃないと夏休みは補習漬けだ」

「ぶーっ」

「中州、こいつに勉強を教えてやったのかよ？」

「ええ、ちゃんと教えましたよ」

眼鏡をついつと上げて俺の質問に答える。

「ですが、僕の勉強方法と田畑さんの勉強方法は違ったよう受け入れてもらえなかったのです」

「だって中州君の難しいんだもん」

「こりゃまたとんだ問題児である。一年の頃は隣のクラスだったからこいつの点数は知らなかったけどまさか赤点常習者だったとはな」

「今度は新戸君が教えてあげたらどうですか？」

「ええ〜俺が？」

「ええ、だって田畑さんの友達でしょう？」

「友達じゃない」

「呪ってやる。わたしは残りの人生を全部新戸風太郎の事を呪って

生き抜いてやるっ」

まるで親の仇を見るような感じである。

「でもよあ、俺は中州より頭悪いぜ？」

「いえ、教える程度ですから大丈夫ですよ。こういったものもやはり阿吽の呼吸が無ければいけません。この前のテニスの授業でもいかななく発揮されていたでしょう？」

「どうだか…テニスと勉強は違うと思うけどな」

「ともかく、僕が教えたのだから今度は新戸君が教えてあげてください。友人が夏休みの補習に参加しなくてはいけないのは見ていて辛いですからね」

「じゃあ中州が教えてあげてくださいりゃいいんじゃないのん？」

「順番ですからお願いします」

「ちえ」

愛夏に勉強を教えるのならともかく、何故に同級生の勉強を見てやらねばいけないのだろうか。期末まで時間があるからいいけど、そろそろ始めないとこいつの場合はまずいんだろっなあ。

とりあえず放課後、中原さんに一緒に帰らないかと言われる前に（最近よく誘われる…部活があるだろうに）図書館に連れ込んだ。

「ちよ、ちよつと新戸、こんな人気のないところに連れ込んでどうする気？」

「くくく、想像に難くないだろう？」

「わ、わたしをむいてあんなことやこんなことを…」

「そうだな、とりあえず返してもらった答案用紙を全部出してもらおうか」

アホに付き合っただけである。

「日本史は自信あったんだけどね。満点かと思ったんだよ？」
無い胸張ってどんと叩く。

「ああ、そうだな。一問ずつ上にずれていけば合計で九十六点だった」

「でしょー？」

結果論である。最後の文章問題の欄に『一問ずれとは定番ですね、次回は頑張ってください』と先生からの言葉が書かれている。

「落ち着いて解けよ」

「反省してまゝす」

本当にしているのだろうか？俺がこいつの点数を心配してやる義理はないんだけどなあ。

そのあと悪かった答えは何処か調べ、基本から問題を解かせてみた。

そんな時、加賀美美奈子生徒会長が図書館にやってきた。

「新戸、こんなところで何をしているんだ？」

「見ての通り友達の勉強を見てやってるんです」

「ほお、それはいいことだな」

俺の希望は『先輩、俺と一緒に放課後期末テスト対策しましょう。わからないところ教えてください』で色々と進展するはずなのに現実にはアホとのお勉強会だからな。

「ども、新戸の親友の田畑焔っていいですよ」

解いておくようにと言った問題をやめて俺の隣にやってきていた。そして、自己紹介をして握手を求めている。

「ああ、これは丁寧ありがとう。私はこの高校の生徒会長、加賀美美奈子だ。一応、新戸の彼女でもある」

握手を満足いくまで堪能し、放した後田畑はしきりに驚いていた。そりゃそうだろうな。まさか先輩が初対面の相手に対して『彼女だ』と言つとは思ひもしなかった。

「へえ〜」

「意外か？まあ、私のような女では新戸も物足りないだろうがな」

「そんなことないです」

「ふむ、そうか。おっと、私は用事があるから失礼させてもらおうよ。新戸、また今度だ」

「ええ、がんばってください」

一冊の本を掴んで図書館から出て行った。受付顔パスとかさすが

生徒会長である。

「さ、俺たちは勉強に戻ろうか。それ終わったら今日は終わりだ」

「うん、わかった…ところで新戸」

「何だよ？」

「一緒に帰ろうよ」

「ああ、いいぜ」

どうせこの後部活に行くわけでもない。部活に入っていないのだから。

たった一問の問題を解くのに数十分かかった友人をどうしたものかと思案するが答えは出ない。いつそ、家庭教師でもつけたほうが（十人ぐらいいければいいかな？）いいかもしれない。そんな結論が出たところで珍しく黙っていた田畑が話しかけてきた。

「あのさ、新戸」

「何だよ」

「あれってどういうこと？」

「あれ？あれって何だよ？」

「さっきの生徒会長が言っていた事。彼女だつて言ってたけど？」

「あ、ああ、あれか。あのな、実はだ……」

俺はアホでもよくわかるように説明しておいた。

「…つまり、二股かけてるって事だよな？」

「いや、大丈夫のはずだ。まずは友達からお願ひしますって言うているからな」

「……はあ」

「何だよ…その人を馬鹿にしたようなため息は」

夕方でもそれなりに暑く、日もまだ強い。そんな最中、田畑は途中で歩を止めた。車が一台田畑、俺を追い抜いて行く

「どうしたんだよ」

「おんぶ」

「おんぶう？何わけのわからない事を言ってるんだよ。暑さで頭やられたんじゃないのか？」

両手を俺の方へと突きだしている。しかし、ちゃんとおんぶしてしまう自分が悲しい。

「あのさ、新戸。二股してるって事がどちらかにばれたらどうなるかわかってるの?」

後ろからそんな声が聞こえてくる。

「ばれるって、なんでばれるんだよ?まだばれてないぞ」

「わたしのことを適当にあしらったり、のけものにしたら今後ポイントがたまって見事満点になると…なんと…」

ポイントの溜まる方法がまるでマゾみたいである。

「何かもらえるのか?」

「中原さん、そして加賀美生徒会長に二股している事をばらします」
「……」

「新戸、おんぶして」

「してるだろ」

「うん、でも大丈夫だよ」

「何が?」

一呼吸置いてさっきよりも小さい声が聞こえてきた。

「中州君と、わたしは多分、そんな人類の屑みたいな新戸と友達でいてあげるからさ」

「そりやどうも……しっかし、お前重いなあ〜いたっ」

「そりやそうだよ。だって二人分の鞆持ってるんだから」

「あーはいはい、そうね、だから重いのね」

田畑が中原さんにぼろっところぼろっ確率九十パー超え。辞世の句でも考えたほうがいいんじゃないかと真剣に悩んでいる俺…これが青春なんだろうか?それに、悩む事はまだあって先輩の誕生日も近いのだ。

第七話・広がる事実（後書き）

どうも作者の両月です。長期連載をする予定は今のところありませんので適当に読んでもらうのがいいかもしれません。今回の報告は以上です。

第八話：プール掃除

第八話

五月はこれと違って特徴的な事もなく（いや、田畑に二股つぼく
なっていることがばれたが）、六月。

梅雨時、しかしながら体育は水泳も入ってくるわけでプールの掃
除があったりするわけだ。我が羽津高校では生徒会がプール掃除を
行うのが伝統だかなんだかで、俺も呼ばれていたりする。

「手伝わせてしまつてすまない」

「いえ、別にいいですよ」

何せ、プール掃除を制服でするわけではないからな。うん、スク
ール水着とはいえ、水着である。しかも、今年の生徒会は『女の園』
と呼ばれているぐらいで男子生徒は入っていないのだ。

「ふむ、そうか」

「新戸君も喜んでいるようですし、手伝ってもらいましょ会長」
加賀美生徒会長と双壁を成すと言われる浅野副生徒会長。眼鏡で、
長髪にバンド、脱いだらすごいと何故だか知れ渡っている人である。
しかも…

「新戸君、ご褒美ですよ」

素晴らしい絶景を見させてくれるように胸を協調させるようなポ
ーズをとってくれる。まあ、サービスピ精神旺盛なのだ。

しかし、しかし…あれだ。隣は生徒会長なのだ。俺が現をぬかし
て居たら怒ったりするんじゃないだろうか？

「あれ、やっぱり彼女さんからしてもらったほうがいいのかな？普
通だったらだらしのない表情見せてくれるんだけど…顔色うかがって
いるようじゃ駄目ね」

「あゝ……はは」

先輩の方を見るけど特に何とも思っていないようだった。ちょっ
とばかり、さびしかったりする。

「会長」

「何だ？」

「いつも公私ともに新戸君に手伝わってもらっていますよね？」

「ああ、そうだ。そうだな、新戸？」

「え？ええ……」

「いわば先輩の第三の腕と言ったところだろうか？いや、会長の下僕と言ってもいいかもしれない。」

「お礼とかしてないんですか？」

「失礼だな。ちゃんと手伝わってもらったら『ありがとう』と言っているぞ」

胸を張って先輩は仁王立ちしている。手を合わせておいた。

「いや、そうじゃなくて……」

「しばらく悩んでいた副生徒会長は浅野生徒会長は俺に近寄ってくる。」

「な、何ですか……よからぬ事を考えている目をしてますけど」

「後ずさり逃げられる距離にも限界があり、かかると何か当たったところで終わってしまう。俺の顎に手を這わせ、胸を押しつけ、足を絡めてくる。」

「新戸君、いつもありがとう……キスしてあげるね」

「え、ええ……」

「いや、冗談だと言っただけだ。ほら、やっぱり男って心の奥底で『いけるかも、いけるかもしれない』って思うときあるじゃん？人前ってわかっていてもやっぱり期待しちゃっただよ」

「そういえば、先輩も近くにいたんだっけか。」

「先輩のいる方へと視線を動かすが浅野先輩も身体を動かして見えない様になっていた。」

「あら、やっぱり彼女の方が気になるの？でもね、今日に映っているのは私だけでしょ？違うかな？」

「ち、違いますっ」

「じゃあ、目を閉じて」

「……はひい」

言われるままに目を閉じる俺。きつと飴ちゃんあげるからと言われただけでほいほいと暗がりに入れて行かれてしまふのだから。

そう、俺一人だけなら確実に連れて行かれるだろうな…残念、先輩が近くに居るのだ。

「そこまでだ、そういうのはよくないぞ」

副生徒会長の後頭部を引っ張って俺を解放する。

「大丈夫か？」

「え、ええまあ」

ちよつと惜しいかと思いつつ、そういった甘い考えが中原美奈子との間柄を未だ解消できていない要因なのだと冷静に分析してみる。「大丈夫って、別に何もしてませんよ。ちよつとちゆうしようって思っただけです」

「校内では禁止されているだろう」

「ちよーつとぐらいいいじゃないですか」

「駄目だ。絶対に新戸には手を出すな」

「へえ〜会長がそんな事を言うのは珍しいですね〜」

「当り前だ、新戸は私の彼氏だからな」

胸を張って言うてくれる先輩が神様に見えた。気のせいかな、後光まで見えたりする。

「じゃあ会長のいただきますっ」

「む、むぐぐ……」

何と、あるうことが目の前で先輩の唇が副生徒会長に奪われてしまった。そのまま先輩はぺたんと尻もちをついて副生徒会長に押し倒され……

「ぶつつはあ〜……御馳走様でした」

「お、女の子同士で……」

ゆらりと立ち上がる副生徒会長。先輩は放心状態で青空を眺めていた。ファーストキッスが奪われたわけだが、なんだか微妙な心境である。

「さて、次は新戸君の初めてをもらっちゃおうかなあ？」

先輩を心配している場合ではなかった。口元を歪め、両手を顔の横でいやらしく動かしている。

「こ、このままここにいると……やられるっ……いや、むしろ掘られるかもしれん。」

「待てええ〜」

「ひひひひっ」

デッキブラシを振り回しながら追いかけてくる副生徒会長。俺は他の生徒会員を間を抜けたりして逃げ回った。

その後、復活した生徒会長に仲良くゲンコをもらって説教され、大人しく掃除を終えたりする。最後の後片付けは俺と先輩で終わらせ、プールサイドでちよつと話をすることにした。

「ふいー、疲れましたね」

ふいー、副生徒会長につかまって突かれなくてよかったわ、いや、まじで。

「新戸」

「はい？」

「その、色々とすまない」

「…ああ、副生徒会長の事ですか。いいですよ、それなりに楽しかったですし」

「いや、これまでのお礼の事だ」

「お礼…ですか？」

「そうだ。言葉だけで事足りると思っていたのは長い付き合いだから」

「らかもしれない」

「副生徒会長の言っていた事を気にしているですか？俺は別に気にしていませんけど」

むしる先輩の方があんな人前で押し倒されて濃厚なキッスされるとか精神的にくるんじゃないだろうか？考えてみてほしい…同性にいきなり押し倒されて唇を奪われるとか二度と校門をまたぐ事はないだろう。

「お礼をしたいと思う」

「お礼ですか？」

「ああ、浅野がお礼だと言っていた事をしようと思うんだ」

「え、えーと…」

もしかしてキス…いや、そうに違いない。

期待した目で先輩を見たけど、両手を振りたくって顔で思いつきり否定していた。

「違うぞっ、ポーズの方だ」

「ポーズ…ですか？」

「あ、ああ…ほら、男子はそういったポーズをとってもらうのが好きなようだからな。よく浅野は男子生徒の前でポーズをとっている。新戸はどんなポーズをしてもらいたいんだ？」

いきなりそう言われたって困る。いや、キスの心の準備をしていたのにそれは困る。まあ、そんな事だろうとは思ってたさ。うん、先輩が俺に悩殺ポーズをとってくれるなんて今後あり得ないだろうからな。

でも、品行方正な先輩がポーズをとったところできこちない感じで（それはそれでいいけどさ）俺の方が申し訳なくなっちまうよ。「…気持ちだけで十分です。じゃ、俺は帰りますんで…お疲れさまでした」

浅野副生徒会長のポーズはマジですごかった。背筋をぴんと張らせるような感じだったし、猫背も一発で直るぐらいの凄さだったのである。あれを見た後ではどれも駄目に見えてしまっただろう。

帰ろうとした俺の腕を先輩が掴んでいた。抱きつくような感じで。「待ってくれっ、つまり新戸は私に女としての魅力がないと言いたいんだな？」

「いや、そうとは言ってませんよ。十分すぎますって」
殺傷能力を持っていそうな胸とかな。ま、それとこれとは話が別だ。

「気が済まないからお願いだ、何か指示してくれ」

「……わかりました。でもどんなに恥ずかしいポーズでやってくださいよ？」

「ああ、もちろんだ。絶対に成し遂げて見せる」

少々、心苦しいが此処まできたら手加減と言う奴は逆に失礼である。俺は先輩の身体を触りながら指定したポーズをすぐに完成させた。

「こ、こうか？」

「そう、そうです。多分、先輩のそのポーズを見る事が出来るのは彼氏である俺ぐらいなものです。みた人を釘づけにします」

品行方正な先輩がまさか『シエー』のポーズをするわけがない。

先輩が二度とシエーをすることもないだろう。

俺は先輩の恥ずかしいポーズをしっかりと目に焼き付けておいた。

第九話：波乱の回避

第九話

今ではかなりの数が普及された携帯電話。中学生だって持っているし、小学生の中にも所有している子もいる。もちろん、高校生の俺も持っているし、大抵の生徒が持っており、学校に持ってきているだろう。

ただまあ、前提と言うか、『教師の見ている前では使用してはいけない』、『使用が許されている場所だけの使用』といったものが決められている。通話がしている場所は職員室を抜けたベランダ、屋上（立ち入り禁止となっている）の二か所だけだ。

ルールが守られなかったらどうなるか？決まっている…罰を受けるのだ。

「新戸、生徒会室では使用厳禁だ」

「え」

「没収だ。反省文を書いてこい」

たとえ知り合いと言えど、彼氏と言えど、手加減するつもりは毛ほどもなかったようで俺から携帯電話を取り上げた。ちよつと気を許しすぎたかもしれないと思って大人しく引き下がり、反省文を書く為に紙をもらったわけだ。

「私の彼氏だからな。一枚増やしてやるう」

「……ありがとうございます」

全く、嬉しくない。

六月の中盤、俺は携帯電話を数日間使用不可にされたわけだ。使用不可にされた事に腹を立て、親が学校に乗り込んでくるとか冗談にも程がある。

「それは風太郎が悪いんでしょ？はやく反省文を書きなさい」

「へーい」

夕食時でも母ちゃんにそう言われた。そりゃそうだろう、学校の

事に親が関わってくるなんて後ろ指さされるレベルである。モンスターパーアレンツの友人なんて誰ももちたくないだろうからなあ……中学の頃そうだった奴がいたけど、もの見事に隔離されてたな。

家で反省文を書くが、書き終わらずに学校で書くことにした。

「……まあ、特にメールとか送ってくる奴がいるわけでもないか」

ここ最近、電話もメールも母ちゃんからが多い。先輩とは恋人のはずだが、携帯での関係は必要事項のみという何とも素っ気ないものだったりする。一応、先輩にも言い分はあるようで『気持ちが悪くはないだろう』との事である。

朝のHRが始まるまでに書き終えようとするも、埋まらない。

「新戸おっはよ〜」

「おはよう」

元気の塊みみたいな奴が入ってきた。反省文を指差しながら薄っぺらい鞆を自分の机の上に放り投げてこっちに近寄ってくる。

「あれ、ケータイ取り上げられたんだ？」

「ああ、先輩にな」

「先輩……生徒会長さんかあ。相手が新戸と言えど、手加減しないんだねえ……でも当然か」

「なんで当然なんだよ？」

「やっぱりきつちりして欲しいと思うよ。新戸なら尚更ね」

「……そうかもなあ、ちょっと気が緩んでたわ」

「で、どんな事書いてるの？見せて見せてっ」

「ほら」

使用した事を素直に悪いと認めた文章が続いているだけである。受理されなかった場合はボランティア活動に参加せねばならない為に一発で合格を目指さなくてはいけないのだ。別に活動に参加してもいいけどな。

「面白くないね」

「反省文が面白かったら問題だろ」

「うーん、そうだね。でもこう書いておくといいよ……ほら、こん

な感じ」

しよつちゆう取り上げられていそうなイメージがある為に反省文は自信あるんだろうかと見せてもらった。

「……『社会が悪い』って絶対に駄目だろ」

「そうかなあ、学校が悪い、ひいては生徒会長が悪いんだって言えば嫌われるだろうし」

「嫌われちゃ駄目だろっ」

「いいじゃん。二人もいるんだからさく、一人ぐらい失っても」

「本命は先輩だから絶対に駄目だ。つたく、邪魔しやがって……」
社会が悪いと言う文字を消していると中州が入ってくる。

「おや、携帯電話を取り上げられたのですか？」

「そうだよ、反省文書いてるんだ」

「どれどれ……これならすぐに返ってきてそうですね」

「そっか、お前に言われるとほっとするよ。どっかのアホと違ってな」

「むっ、わたしは別に間違ってるでもないもんっ」

いきなり黒板前に移動し、教壇を両手で叩いた。

「皆の者っ、携帯電話を別に授業中に扱ったぐらいで取り上げられるこんな校則、我々の手で買えようではないか」

「ん、何だ何だ？」

「また田畑のアホが騒ぎだしたようだな」

クラスメートからもアホ扱いとは……可哀想な奴だ。

いつものように騒いで終わりだろうかと思っただらそうでもないよ
うでみんな田畑の言葉に耳を貸していた。

「そうだよなあ、確かにおかしいもんな」

「別に休憩時間とかちよつと触ってもいいよなあ」

「この学校に革命を、わたしとともに、みんなで起こそうじゃあな
いかっ」

「おー」

「ありがとう、ありがとう」
ざいます。田畑焰はみんなの住みよい

学校へ変えようと思っています」

「いいぞ〜」

「もつとやれ〜」

盛り上がっている中、俺の反省文は何とか完成した。アホに構っていないくてよかったからかもしれないし、中州がアドバイスしてくれたからかもしれない。そして、とある声が発せられたところでこの集会は一気に静まり返った。

「ちよつと、何の騒ぎ?」

クラス委員長である中原美奈子の声だった。俺に対しては優しいが、こういったことに関しては厳しい。教師から『このクラスは静かで、教えやすい』と言われるのも全てこの中原美奈子のおかげなのだ。きつといなかつたら暴れん坊クラスの名をほしいままにしていた事だろう。

「お腹が急に痛くなったでござる。急性お腹Pごろろでござるよ」
「おお、お主もか。拙者もでござる。なかなかきわどい状態でござる」

「では共に参ろうか?」

「拙者もついて行くでござる」

「では皆で厠に参ろうか?」

「そうするでござる」

男子のほとんどが中原さんに睨まれながら出て行ってしまつ。

「田畑さん、こういう事はあまりしない方がいいよ」

「え〜なんで?」

「いずれ休憩時間だけじゃなく、授業中に使う生徒が必ず出るわ。だから駄目」

「ちえ〜、校則変えたら新戸が喜ぶと思つただけだな」

「それはなんでそう思つのかな?」

「新戸、携帯取り上げられちゃったんだよ」

田畑がそう言つと話をやめてこつちにやってくる。

「風太郎君が田畑さんにそういったの?」

「え？何が？」

中原さんの手が動いたのも一瞬、そして俺の頬がいい音たてて突っ張られたのは一瞬の出来事だった。

「ちょ、ちょっと新戸に何するのっ」

田畑が食ってかかるけど、あっさりと押しつけられて『あゝれ』とか言いながら飛ばされていった。

「…風太郎君、あたしは普通の学校生活を送りたいのっ、その邪魔をしないで」

すっごい迫力である。逆らったらすーっと持ち上げられて爆破されそうだった。

「え、あ、ああ…悪かった」

「わかってくれたのならいいよ。許してあげる」

中州なんていつの間にか隅っこの方に逃げておびえているし、他の女子もびっくりしているようだった。

中原さんはそのまま鞆を持って自分の席に着席。いやーな空気が流れ始めたので俺は教室を出ることにした。

「新戸おゝじつによき響きでござる」

「イライラがすかつと消えたでござるよ」

「新戸のおかげでござる」

「いぢるいぢる」

「いや、俺がぶたれたんだが？」

「ぶたれるのは誰でもよかつたでござる」

「どつでござるか？彼女にぶたれた感じは？」

何だこの御座る口調は？

「あのなあ、あの一撃は迷いのひとかけらもなかっただろっ？」

「確かに痛快でござった」

「そつでござろう？つまり、拙者の事よりも校則の方が大切と言うのがありありと言つこととでござる」

「その通りでござるな。つまり、貴殿は彼氏ではなく、校則の方が彼氏と言う事で間違つておらぬということとでござるか」

「その通りでござる。つまりは、中原美奈子殿と拙者の間柄は不良に切れるクラス委員長という構図だったと言つわけとでござるよ」

まずは外堀から埋めて行く事としよう。俺と中原さんの仲をなかつたことにするには少々時間がかかるかもしれないがこういった偶然を積み重ねて行つてゴールに向かうしかない。

意外と早い段階で無かつた事に出来るかもしれないと思つた俺は浅はかだつたのかもしれない。

俺がぶたれたその日の一時間目休み時間。俺は中原さんに連れだされていた。

彼女は泣いていた。

「本当、本当にごめん。風太郎君の事をぶとうなんて思わなかつたんだ。でも、あたし、クラス委員長だからクラスの皆のために率先して悪い事をしようとしている人を止めないといけないから…だから、だから…怒らないで？」

うわー、どうするよこれ。すつごく面倒なことになつたんじゃないのかしら？

「は、はは、別に怒つてないから気にしなくていいよ。じゃ、俺、教室に戻るから」

逃げようとした俺の腕を掴む。まだ何か言いたい事があるらしい。

「今度はどうしたの？」

「お願いだから、他のみんなに変な事を言わないで、もう、ぐずつ…あまり友達もできなくて風太郎君に嫌われたらあたし、どうすればいいの…」

「あ、うん、ご、ごめんねえ」

まさか男子との会話が聞かれていたとは…いや、声高らかに最後の方は『よきにはからえ、がははは』ってやってたからな。そりゃ

誰でも聞こえるか。

「……そういえば、風太郎君に昨日の夜電話したんだ」

「え？」

「そうしたら生徒会長が出て、びっくりしたよ。驚いてきつちゃって…本当に、びっくりしたよ…あ、ごめん、ネクタイ曲がっちゃったね」

別にネクタイは曲がっていなかった。だけど、中原さんはそれを正してくれて……ちよっときつめに絞めてくれた

「あ、ごめん、つい力がこもっちゃって」

「あ、いいよいいよ…」

「じゃ、あたしもう行くね」

すぐさま笑顔になって行ってしまった中原さん。なんとなく、嘘泣きしていたんじゃないかと思ってしまった。

第十話：別れるための第一歩

第十話

プールの底が綺麗に見えるのも数週間程度だろう。再びプール掃除がやってくるんだろうが、この苦勞はあまり知られていないらしい。

今年初めての授業での水泳。スクール水着に各々着替え、男子は女子側の方をちらちらと見たりする。

「どう？どう？わたしって魅力的？」

男子の中に女子が一人まぎれているだけだな。誰も田畑の事は見ておらず、先生が来ていない間に見ているようであった。

「これぞ夏でござるな」

「そうでござる」

また御座る共が沸いていた。

沸いた侍ども（もしくは忍者か？）を無視して俺は一生懸命無駄なポーズをしている田畑の肩に手を置いてため息をついた。

「……田畑君、私は実に残念だ。何せ、君に無慈悲な言葉を投げかけねばならないのだから。ああ、誤解しないでほしいのだが、これは決して君の事が憎いとか、嫌いだとかそういう感情一切ぬきの真摯な言葉だから受け止めてほしい。残念な身体だ。うん……いたあつ、なんで殴るんだよっ」

「そこは嘘でもいいから『あゝはいはい、すごく魅力的な身体だよ』っていつてくれればいいじゃん。逆に傷つくよっ」

投げやりでもいいのなら始めっからそう答えてやればよかった。

「でもまあ、僕から見ても残念……ぐはっ」

「中州君ってばいつの間にも新戸っぽい思考回路になったのかな」

フェンスに中州を押しつけてぐりぐりやっている。可哀想に……

中州、俺の為に犠牲になってくれてありがとう。君の尊い自己犠牲は一分程度俺の脳みそに書き込んでおくよ。

「風太郎君っ」

馬鹿を眺めていたら声をかけられた。後ろに控える男子生徒どもが感嘆のため息をもらしていた。

「はいはいどうしたの？」

俺の目の前には中原さんがいた。当然、水着姿だ。それなりのプロポーション（俺の基準が副生徒会長の為に世間一般的にはかなり大きい方だと思う）で、実に健康的だった。

「ど、どうかな？水着、似合ってる？」

スクール水着に似合う、似合わないなんて存在しないと思うんだ。

「あー、似合う似合う、すっごく似合ってるよ」

「そっか、よかったあ…じゃ、またあとでね」

「はい、またあとでねっ」

「ばいばい」

田畑も何故か手を振っていた。男子と女子は別に授業を受けるんだけどな。

「ほら、お前ら集まれ、授業を始めるぞっ」

先生も何か言ってやってくればいいのに一切触れない。

「じゃ、お手本は田畑がやってくれ」

「了解ですっ」

そして、お手本を田畑にやらせるとは……。

俺はある程度泳いだからプールに上がり、先生に言う事にした。

「あの〜先生」

「どうした？足でもつったのか？」

「いや、なんで田畑がこっちにいるんですか？」

「それは授業を受ける為だろう。それ以外に何かあるんだ？」

「あ、いや、そうじゃなくて…女子はあっちでやっているじゃないですか」

そう言つと俺の肩を先生が力強く握った。

「いいか、新戸」

「はい？」

「男女差別はよくないぞ。今は平等の時代だからな。田畑はお前と仲がいいし、スポーツは全体的に得意だ。うん、お前よりな」

「何気にひどいっすね」

「そう怒るな。人間には得手不得手と言うものがあるんだよ。そんな十人十色の友達と一緒に汗を流す、これこそまさに青春じゃあないか。さあ、一緒に汗をかこうっ」

もはや何を言っても無駄のようだ。俺は大人しくクロールの列に加わることにした。

最初と言う事もあってか基本的に自由のようだった。先生はプールサイドで腕立てをしているし、泳ぐのに疲れた連中は先生の近くで腕立てするふりをして女子のほうをちらちらと見ている。

「はあ……」

俺はプールサイドの淵に座り込んでぼーっと水面を眺めていた。

「元気ないねえ」

田畑が寄ってきて俺のすぐ隣に座る。中州もおまけで付いてきたようだが、他の男子生徒につかまってプールの中に放り込まれて遊ばれている。

「どうかしたの？まさかばれたとか？」

「いや、ばれてもないけどさ……っーか、別にそっちの話で疲れてるわけじゃないって」

「へえー、てつきりそれだと思ったよ。他に悩み事なんてなさそうだし」

「まあ、悔しいけどそうだな。これからどうしようかなって思っただよ」

「え、何が？」

頭の中で簡単に説明できるようまとめる。もちろん、他の連中に聞かれない様に注意して話すことにしている。

「…波風立たせることなく終わらせたいんだよ」

「ん〜それは虫がよすぎるだろうけどね。でもさ、それを成し遂げたいのならわたし、協力するよ？」

「ん、ああ……ありがとう」

「というわけで、まずは相手の事を知ることから始めたほうがいいんじゃないのかな？」

「開いての事を知るか。なるほどな」

「田畑、中州が足ついたらしいから保健室に連れて行ってやってくれ」

先生の危機感の薄い声が聞こえてくる。どうもプールサイドでいきなり足をついたらしい。

「はいはい。じゃ、わたしいくね」

「ああ」

相手の事を知る事から始めるか……。

女子の方へと視線を移すと気のせいかな、中原さんと目があつた……
…やっぱり気のせいかな。

第十話：別れるための第一歩（後書き）

別に記念すべきってわけじゃありませんが十話目です。この小説、書いててハッピーエンド出来そうにないんですけどどうしたらいいんでしょうねえ。文字打ってて頭の中で勝手に話が進むのですがどうもちょっと暗い話になりそうで怖い怖い。読んで後悔した小説第一位でも目指しますかね。

第十一話：見られている気がするだけ

第十一話

天気予報じゃ雨が降るなんて言わなかったはずだ。おかげで傘を持って行っておらず、帰りはひどく濡れてしまった。相合傘をしてくれる相手はいるにはいる……ま、先輩は生徒会で遅くなるし、結構早い段階で分かれ道に来てしまうからあまり意味がない。

中原さんも用事があるようで何も言っていない俺に謝りに来た。朝に真っ赤な目立つ傘を持ってきていたのは既に確認済みである。

一応、田畑と帰りが一緒になったから恥を忍んでお願いしたところ「しょうがないなあ〜けど、新戸のお願いだからねえ」
等といいつつも傘を広げてくれた。

開いた瞬間、田畑の傘の上部分はすぽんと取れて風にあおられ飛んで行ってしまったのだ。

「……あ、相合傘する？」

「その銀のステッキじゃ出来んだろ」

「新戸、青春って言うものは雨に打たれるのが最高なんだよっ」

「お前の頭が雨に打たれてよくなるといいな」

後日、飛んで行った傘の上部分がお地藏さんの頭の上に無事着陸しているのはまた別の話である。

田畑と共に文句を言いつつ俺は家に帰りついたらと言っわけだ。当然、家に帰りついたらお風呂に入ることにする。シャワーでもよかつたんだけど、やっぱり全身濡れちゃうからな。少し冷えた身体を温めたいわけよ。

風呂から上がってパンツを装着。そのまま自室へと行こうとしたら愛夏がいた。

「お、来てたのか？」

「うん、今日お母さん達帰ってくるの結構遅いし、雨でぬれちゃったからシャワー借りようと思ってさ」

「そうかそうか、風呂という選択肢もあるからな」

「うん、わかった」

一応愛夏の部屋のようなものもある為に着替えに関しては問題ない。その点に関しては問題ないけど、パンツ一丁の男を見て何とも言わないのは問題があると思う。

脱衣所へと向かう愛夏を呼び止め、少しばかり説教する事にした。服は着たのかって？パンツは立派な服だから大丈夫だろ。

「愛夏、ちょっとそこに座りなさい」

「何？濡れてるんだから早くしてね」

「ああ。愛夏、お前もお年頃の女の子だ。親戚とはいえ、俺のパンツ一丁の姿を見て少しくらいは騒いだほうがいいぞ。高校生の頃から達観した態度はいかなもんかと思うんだ」

「じゃあ兄貴、パンツ脱いでよ。さすがに脱いだら騒ぐからさ」

待て、なんで右手に携帯電話をカメラモードで待機してるんだ？そしてなんで笑ってるんだよっ。

「じゃ、愛夏はお風呂に入ってくるからね。あ、そうそう……」

言い忘れていたと言わんばかりの態度だった。

「……やっぱり、愛夏から言わせてもらえば別れたほうがいいと思うよ」

「そうか」

「うん、それと……」

歯切れが悪いと言うか、何と言うか……去り際に残したのは実に信じがたい言葉だった。

「出来れば、生徒会長とも……」

ただ、この言葉は微妙に聞きとれなかった為にもしかしたら『出来れば Saint And Kind』と愛夏がいった恐れもある。意味なんてわからんけどな。

愛夏があがってくるまで暇だったので携帯電話が光っていたのでメールの相手をする事にした。登録した事のないようなところからのメルマガや『二十七歳の人妻ですが……』なんてメールが多量に

来るために迷惑メール対策を一応はしている。

今回のメールをしてきていたのは中原さん。内容は…

「……………お風呂どうだった？……………か」

あの人、俺の私生活でも覗けてるんじゃないだろうか。いやいや、そんな事はある得ないだろうからな。雨降っていたし、こりや家に帰ってお風呂に入ろうかしらとか言っていたからそれで予想しただけだろ。

中原さんに『うん、よかったよ』と送ったところすぐに返信が…
『そっか、いいね。あたしも入りに行こうかな。ところで、今あたしは“何”をしているでしょう？』

そんな内容のものだった。

何をしているのか？息してるじゃないの……………なんて送ったら馬鹿にされるか。真面目に考えたっていい答えは思い浮かばないので、中原さんのメールをまねることにした。

「シャワーを浴びている……………で、いいか」

メールが一分程度で返ってくる。

『正確にはシャワーを浴びながら……………してる。また学校で』

「何してるんだろ」

結局詳しい事は謎のまま。

「兄貴、あがったよ」

「おう……………って、こら、なんで下着姿で出てくるんだよ？」

「未だパンツ一丁の兄貴が言っても説得力無いよ」

「俺はいいの。ほら、服を着せてあげるからこっちに来なさいっ」

愛夏に服を着せ、その後は制服の乾燥を行った。お風呂に入る前に愛夏が言っていた事を聞いてみたけど教えてくれず、メールの事もあって変に想像してしまう。ほんの少しだけ中原さんがどういった人間か知りたくなった。いや、表面じゃなくて裏の方ね。怒ったりしたら素の顔が出るだろうし……………。

第十二話：夏祭り一日目

第十二話

幸か不幸か、期末テストのちよつと前に三日間夏祭りが行われる。確か、恨みの神様を祭っていたんだっけか？うーん、まあ、疫病神的扱いだったらしいけど、茉莉を行う事によって神様の心を癒したとかなんとか。

「今日から夏祭りだよね」

いつの間にか昼のメンバーに中原さんが加わっている。その事に文句を言う他の二人（田畑は無表情、そして中州も無表情）でもなく、ただ淡々と昼飯を食べている。

「ん、そうだなあ」

「風太郎君、一緒に行かない？期末までほんのちよつと時間あるから」

「そうだな、行こうかな」

「そっか、よかったあ…」

「田畑はどうだ？」

「え、あゝ…わたしはいいよ。だって、期末は頑張らないといけなから」

どこだか遠いところを見ているようだった。

「そうか。って、俺が教えないといけないんだな。悪いな、中原さん」

嫌そうな顔をしているようにも見える。見えるけどしょうがないといった感じだった。

「僕が引き受けますよ」

それまで黙っていた中州がそういった。

「え？中州が俺の代わりに中原さんと一緒に夏祭りに行くのか？」

「違いますよ。僕が代わりに田畑さんに勉強を教えるんです」

「なるほどなあ」

「とういうわけで田畑さん」

「何？」

「お昼も食べ終わった事ですし、早速図書館に向かいますよ」

あんな小さな体にどんなパワーを秘めているんだろう。いやがる田畑を引つ張って連れて行ってしまった。

「えーと……」

「うん？」

「学校の帰りにすぐに行けばいいの？」

「それはまずいよ。学校帰りに寄ったりしたらいけないんだからさ。こんなときでも真面目である。」

「学校終わって、着替えて校門前に集合でどうかな？」

「それでいいよ」

「じゃ、あたし用事があるからちょっと行って来るね」

「ああ」

中原さんが教室から出て行くとクラスの男子が俺を囲む。

「時が経つのは早いでござるな」

「気が付いたら夏、そして夏祭りイベントでござったか」

「羨ましいでござるっ。圧倒的、絶対的に羨ましい存在でござるよっ」

「他の男子全員には敵しいでござるがそれでもやはり、このクラスのアイドルでござるよ」

「うざるうざる」

こいつらは何がしたいんだろうか。首をひねったところで答えは出ず、無駄な時間を過ごしているようにしか思えなかった。

午後から中原さんは絶好調のようであった。頻繁に手を上げ黒板に問題を解いたり、英文法を一人で全訳したりと先生も少し驚いていた。掃除時間もその効果は持続していたようで一緒に掃除していた女子は『まるで三人いるように見えた』と語っている。

帰りHRもあっさりと終わり放課後。

「じゃ、着替えたらすぐに校門前に立ってるから」

「わかった」

嵐のように去って行った。

「新戸、帰ろ」

「ああ」

中州と田畑と共に校門を後にする。

「新戸と夏祭り行つて楽しいのかなあ」

「世の中、もの好きと呼ばれる方はいますからね」

「お前ら失礼だな。でもまあ、それは否定できないか」

恋は盲目って奴だろうか。俺も先輩と一緒に夏祭りとか行けたらあんな感じになっちゃうんだろうね。

「新戸君、頑張ってください」

「おう」

「またね」

分かれ道で中州と別れ、田畑が残る。

「新戸と夏祭りかあ、楽しいのかなあ」

「あのなあ、そこまで疑問視する事なのかよ」

「うーん、ほら、中原さんってすごく真面目で間違えたりしないけど、新戸の事になると間違えそうだなって、ちよつと、周りが見えない時があるからさ」

「それは……どうだろうな」

「ともかく、わたしは期末の勉強があるからね。明日以降、わたしたちの前じゃ夏祭りの思い出なんて言わなくていいから」

「ああ、それは注意しておく。それと、明日から覚悟しておくことだな……くくく……中州以上に張り切つてお前を教えてやるからな」

「それは望むところだよ」

明後日ぐらいにはへばっている田畑の姿が容易に想像できるのは何故だろうか。しかし、友人は時として鬼にならねばいけないのだ。家に帰りついてさっさと準備をする。女の子を待たせるのはいけないことだとテレビで誰かが言っていた。一応、身だしなみの為に鏡の前に立ってみただけ、かっこいいとはいえない顔が映される。

「…確かに、物好きかもなあ」

くして髪を押さえつけてみたけどいまいち決まらない。しょうがないのでそのまま出ることにした。

「中原さん…」

「よかった、ちょうどチャイム押すところだったんだ」

玄関からでて少し先に中原さんの姿があった。淡いピンクの浴衣で、お祭りムード漂う姿である。

「どうかな？似合ってる？」

「うん、いいんじゃないかな」

「じゃ、行こうか？」

道中、雑談をしながらちらつと盗み見る。なるほど、確かに男子に人気があるっていうのはわかる気がするなあ。

「ん、どうかしたの？」

「え、ああいや…別に何でもないよ」

「見とれてたとか？」

「いや、違うけど…」

「そこは嘘でもいいから頷いてほしかったかな」

「うん、すつごく見とれてたよ」

中原さんのため息交じりで首を振られてしまった。ただ、その表情は嬉しそうである。

お祭り会場についてお賽銭を放り込む。なんか罰当たりな表現だけど、事実だ。何かお願い事でもしてみるかと考えてみる……そういえば、俺って中原さんと別れたって願わないといけないんだよな。

再び、中原さんを盗み見る。彼女は一生懸命お願い事をしているようだ。直接的に『中原さんと別れたい』とか叶うものなのだろうか？そう言った後ろ向きのお願い事は身の破滅を呼びそうだし、ポジティブな願い事しておくことにしよう。

『……先輩と仲良くなれますように、先輩と仲良くなれますように……』

しかし、いつから俺は他力本願な人間になってしまったのだろうか。人間って神様に頼ってばかりじゃあないか……でもまあ、それでも願いが叶えばたなぼたである。

その後は軽く二周ほど屋台を周る。時折きよるきよると中原さんは辺りを見渡していたのでくじ屋の前で尋ねることにした。

「誰か探してるのか？もしかして彼氏？」

「ううん、そうじゃないよ。周りカップルばかりだなくって思ってたね」

言われて辺りを見渡すと中原さんの言うとおりだった。いちゃいちゃしまくりやがって目に毒だ。俺も先輩といちゃいちゃしながらお祭りを楽しみたい。

「周りから見たらあたしたちもあんな風に見えるのかな？」

「客観的な意見を言わせてもらうとそうだと思います。何せ、辺りの男女のペアは実に親密な態度をお互いがとっており、なにより仲良くなければ二人組でこないでしょう」

「そっか、よかった」

俺の渾身のボケは見事にスルーされてしまった。さらに、さっきの言葉が引き金になったのか俺の腕に手を回してきたのだ。

「あのさ、あたしの立ち位置って風太郎君の中ではちゃんと友達からちょっとくらい進展してる……よね？」

「あ……どうだろ」

こんな曖昧な言葉じゃやっぱり怒るだろうか？頬を掻きながら隣の中原さんを見る。いつも通りのようではあった。

「うーん、そっか。じゃあ頑張らないといけないんだね。だからさ、今日だけ腕組んでもいいよね？」

「う、うん」

遠慮なく俺の腕に胸を押し当ててくる。なんだかどんどん沼地に足を取られている気がしてならない。こういうところを先輩に見られたらどうなるんだろうか？

そういえば、学校の近くって言う事もあってちょっと遅くなると

先生たちがうるつきはじめたな。ま、隣にいるのは真面目なクラス委員長だからあんまり遅くなる事もないだろう。

「風太郎君、あつちに焼きそばが売ってるよっ」

「よーし、じゃああれで晩御飯の代わりにしようか」

そんな感じで俺は普通に中原さんとの夏祭りを楽しんでいた。帰り道、俺はどんな願い事をしたのか中原さんに聞いてみたのだが

……

「風太郎君には絶対に教えられないよ」と言う事であった。

第十三話：夏祭り二日目の思いで

第十三話

中原さんと一緒に夏祭りに行った次の日の昼休み。

「風太郎君と行った夏祭り、すつごく楽しかったよ」

「そうですか、それはよかったですね」

中原さんの話を聞いているのは中須ただ一人。田畑と俺はもう何度目かわからないその話題に正直疲れてきているのだ。

「すごいね」

熱弁している中原さんを見ながらどうでもよさげに田畑がつぶやく。

「ああ、正直中州があそこまで耐えているのは驚きだ」

「もう七回目だよ」

「そんなに少ないのか？二桁はいつてるって思ったんだけど」

「一回が長いし、面倒に感じるほどそんなもんだよ……」

箸をかじりながら田畑はこっちをじーっとみている。

「なんだよ？」

「ん、いやさあ、よかつたじゃん。また仲良くなれたみたいで」

「……多分、今日行っていたらもつと熱弁をふるっていただろうな」

「ん、ああ、そっか。確かにそうだね今日の方が思い出に残るって思ったけどなあ……で、どうするの？」

「どうするって…何の事だよ」

「とぼけちゃって」

人差し指と中指を立てる…つまりはVサイン。それを逆さまにする……つまりは二股。

「ど、どうするって…」

「最低最悪碌でなし」

ばっさり切り捨てられる。事実だ、そうなんだけど反論したくなったりする。

俺が何か言い返せないかと考えていると放送をつけるチャイムが鳴り響いた。

『二年生の新戸風太郎君、至急生徒会室までお願いします。繰り返し放送します…二年…』

田畑がさつきよりも険しい顔をしている。

「あのさ、もしかしてばれたんじゃないの？」

「ば、ばれたってなにが？」

「うん、何がばれたの？」

いつの間にか中原さんまで会話に参加してきているようだ。

「それはともかく新戸、早く行ってきなよ」

「そうですよ」

「あ、ああ…」

中州、田畑のおかげで中原さんに詳しく突っ込まれる前に教室を後にする事が出来た。

生徒会室までやってきてさっきの田畑の言葉が思い出される。

『あのさ、もしかしてばれたんじゃないの？』

夏祭りだったしな。真面目君が帰るにはちょっと遅い時間だったからな。視界の端に生徒会っぽい人がいたような気がしないでもない。

未だ扉は開かれていない生徒会室。中では誰が待っているのか非常に気になる、気になるんだけどとりあえず開けないとまずいだろう。

「し、失礼します…」

どうせ先輩が俺に用事で呼んだだけだろう。そう思って足を踏み入れる。

「はあ〜い、新戸君」

「浅野先輩……」

バンドでまとめられた長髪で眼鏡、浅野副生徒会長が机に足を組んで座っていた。足は椅子の背もたれに乗せられている。

「あの、浅野先輩が俺を呼んだんですか？先輩……えーっと、加賀美先輩じゃないんですか？」

「今ちよつとトイレに行ってるわ」

「あ、そうなんですか」

ちよつとだけ寿命が延びた気がした。

「あ、そうそう、見ちゃったの」

「み、見ちゃった？」

「うん、そう」

足を組みなおす。生徒会に入っている癖に短いスカートとかなんで何だろう。ああ、いかん。そつちに視線をもってはいけません……。

浅野先輩を睨むように顔を上げる。

「あら、そんなに怖い顔しなくなっただっていいじゃない」

「別にしてませんよ」

「まあ、いいわ」

先輩は立ち上がって俺に近づき、人差し指で顎を触る。

「昨日の事、黙っておいてあげるわ。ま、どうしようもない状況に陥っているとは思っけどさ……」

まるで悪魔のような微笑み方だった。

「悪い事をしている人間は遅かれ早かれ酷い目に会うのが道理よ。

「気をつけなさい」

「……」

浅野副生徒会長はそれだけ言うと生徒会室から出て行ってしまった。

それから少し経って先輩が入ってきた。

「新戸、すまない。言い訳になってしまいが放送の後、浅野が私の髪にケチャップを間違えてこぼしてしまっただ。さすがにまずい

だろうと思って洗ってきた……ん、どうした？顔色が悪いぞ」

「あ、いや…そんなことないです。ところで俺を呼び出した理由は何ですか？」

「ああ、そうだったな。実は今日の放課後、また手伝ってもらいたい事がある」

「そうですか、わかりました。帰りのホームルームが終わったらすぐに生徒会室に来ます」

「うん、頼んだぞ」

先輩からの頼み事はいつもこんな感じで軽く終わる。いつもの事なのだが、今日はやけに緊張してしまった。やっぱり、後ろめたいって気持ちがあるんだろうか。

時間が経つのが早いなと思っているとあっという間に放課後になった。

「…おい、新戸」

「え？何だよ？」

「ぼーっとしてるけどどうしたの？やっぱりばれちゃったの？」

田畑のその言葉に俺は首を振った。

「それはよかったと言うか……複雑なところですね」

中州の言葉に俺はため息をつくしかなかった。

「じゃ、俺これから先輩の手伝いがあるからまた明日な」

「うん、また明日」

「それでは失礼します」

つい中原さんを目で探してみたけどクラスにはいないようだった。

「あれ、中原さんはいないのか？」

「うん、もう帰っちゃったよ」

「そうか」

別に未練があると言っわけじゃないのでそのまま生徒会室へと赴く。

「先輩、きましたよ」

「そうか、じゃあ今日何をするのか言わなくてはいけないな」

先輩は腰まで長い髪の毛をまとめており、箒をもっている。何を
するのか大体想像がつく。

「見ての通りだが、生徒会室の掃除を行う。他の生徒には私と新戸
が掃除を行うと言う旨を伝えて帰ってもらった」

「わかりました」

「新戸は私の机が無い方を掃除してくれ」

「はい」

身の回りの事は自分でやりたいのだろう。まあ、私物があるから
な。たとえ彼氏といえども見てもらいたくないものがあるのかもしれ
ない。

他の生徒の私物はあっても筆記用具ぐらいだろうか？比較的重た
い机のところも何とか動かして掃除をする。

「こちらは終わったからそつちを手伝うぞ」

「あ、こつちももう少して終わります」

先輩より少し遅れて俺も掃除を終える。粗末に扱うと股間を殴打
すると言われる狸の置物を拭いた時は縮みあがっちゃまったぜ。

「新戸、御苦労さま」

「お疲れ様です……あの、先輩」

思ったより終わった時間は早かった。これからお祭りに行っても
十分楽しむ事が出来るだろう。先輩をお祭りに誘うつもりで口を開
きかけたが、口から出た言葉はお祭りに誘う言葉ではなかった。別
のいい方法を思いついたのである。

「ん？どうした？」

「えっと、ちょっと待っていてくれませんか？」

「ああ、いいぞ」

「すぐに戻ってきますんでっ」

俺は誰もいない廊下を全力疾走で駆け抜け、階段も気合で飛びお
り続けた。そして、靴を履くと先ほどと同じで全力疾走……お祭り
会場まで五分程度でたどり着けた。

「ふう……はあ……はあ……」

たこ焼き屋を見つけ、二パック購入する。

「まいどあり〜」

たこやきのパックを二つ持って学校へと戻ろうとした……その時だった。

「風太郎君」

「え？な、中原さんか……」

祭り会場にいたのは普段着の中原さんだった。

「風太郎君、今日も来てたんだね？一日じゃ足りなかったの？」
身体から異様なほど汗がわき出てくる。

「はは、いや、違う。見ての通り走って此処までわざわざたこ焼きを買いに来たんだよ。たこ焼きとか普通ないからな」

「そっか、今一人？」

「そりゃ全力疾走で来たから一人だよ」

「ふーん、そっか」

「中原さんも一人？」

「ううん、今日は友達と一緒に」

「そっか、じゃあ俺急いでるから。また明日」

「うん、またね」

学校へと帰る途中、俺は気が気じゃなかった。もし、俺が先輩を誘って夏祭りに行っていたらどうなったんだろうか。奇跡的に中原さんと出会わない？いや、多分それはないだろう。中原さんがいたのは入り口前ぐらいだったし、絶対に目についてしまうこと間違いなしである。

「ただ今戻りました」

とりあえず危険は回避されたんだからいいとしよう。俺は気持ちを入れ替えることにした。

「お、祭りに行っていたのか？」

「ええ、先輩、たこ焼き好きでしょう？」

「ああ、大好きだ」

俺からたこ焼きを受け取った先輩は早速食べようとしたが、待つ

たをかける。

「先輩、屋上に行きませんか？」

「屋上か？」

「ええ、先輩なら鍵持っているから開けられるでしょうし」

「うーん……新戸の頼みじゃ仕方がないな」

「ありがとうございます」

その後、先輩と一緒に屋上に上がったたこ焼きを食べ始める。

「少し、冷めてますね。すみません」

「いや、暑くても食べられないから気にするな」

ちらつと腕時計を見るとそろそろ時間である。

大きな音がしたかと思うと夜空に花火が撃ちあがった。

「そうか、今日は花火が撃ちあがるのか……」

「特等席です。先輩じゃないと見ることでできないでしょうね」

「そうだな……」

あまり大きな祭りではない為に花火は長い間撃ちあげられると言
うわけじゃない。十分程度で花火も終わってしまう。先輩の驚いた
ような表情もそれで終わってしまった。

「さあ、そろそろ帰りましょうか。見周りの人が来るでしょうし」

「……ああ、そうだな。新戸、すまない」

「何がですか？」

「いや、色々和新戸は考えているんだなあ今日は勉強になったよ」
「特に何も考えてないですけどね」

先輩の心に少しでも残ってくればいいなあと思いつつ、俺は屋
上を後にする。ただ、ちよつと気になったのは先輩がどこか暗い表
情をしていた事であった。

第十四話：夏祭りの余りモノ

第十四話

「夏祭りに行こうよ、兄貴っ」

「愛夏、そういうのはお前が俺の家に来てきたときとか、最初に言う事だぞ」

既に目の前には祭り会場がある。手を伸ばせば浴衣姿のお姉ちゃんの胸をタツチ出来るぐらいの差しかない。

まあ、夏祭りの三日目はさすがに人が減ってきているため穴場と言えば穴場である。しかし、花火も二日目で終わるし、特にこれと言って説明することなんて無いだろう。売れ残りの金魚をすくったりするか、屋台を適当に冷やかす程度で終わるだろう。

「さ、お賽銭投げに行こうよ」

「えー、俺一日目で投げ入れたんだけど？」

「来たら投げないと駄目だよ」

神様は俺からいくらしぼりとれば気が済むんだろうか？

結局は無駄な抵抗であり、愛夏に引っ張られていくわけだ。

「おろ？」

「どうしたの？」

「ん〜いや、どこかで見た事あるなあって後ろ姿を見つけたんだよ」
そのどこかで見たことある後ろ姿はおもむろに財布を取り出すとお賽銭を投げいれる。そして手を叩いて一生懸命お願いしているようだった。

一分、二分、三分……五分経過しても動きが無い。

「ねえ、兄貴、時間の無駄だから早く入れようよっ」

「ああ、悪い悪い。そうだな。行こうか」

愛夏を引っ張って賽銭を投げいれる。愛夏がお願い事をしている間に俺は未だ何かお願いごとをしている人物の隣まで移動すると肩に手を置いた。

「田畑、お前いつまでお地藏さんになってるんだ？」

その後の田畑の行動はほんの一瞬に起こった事である。目を見開き、俺を捉え、口を開けて尻もちをついた。

いつも面白い奴だが、今日はいつにもまして面白かった。口をパクパクして俺を指差している姿なんて写メでつい撮ってしまったくらいだ。

「に、新戸……ど、どうして此処にいるの？」

「ん、まあ、色々とあるんだよ」

「だって三日目だよ？新戸は三回目だよ？今日のお昼休みだって先輩と楽しかったって言ってたじゃん」

「俺も来たくはなかったんだけどな」

いまだ尻もちをついている田畑が目立ち始めたので俺は起こしてやることにした。

「えつと、誰かと一緒に来たの？」

「ああ、妹分と来た」

「妹分？」

「あれ」

「えーつと、あそこで必死に『兄貴が別れますように』ってお願いしている子だよな？」

「なぬっ」

愛夏は念仏を唱えるように呟いていた。そんな愛夏に俺は近づいてため息をつく。

「あのなあ、愛夏。そういう願い事は口にしちゃ叶わないぞ」

「突っ込むところそこ？」

愛夏は俺の方を見た後に隣の田畑へと顔を移す。そして居住まいを正すと人差し指を田畑へと突きつけた。

「あんたが兄貴の彼女ぶってるっていう中原美奈子？んならいつでも、あんた男を見る目がこれっぽっちも（人差し指の腹と親指の腹が限りなく近い）ないからっ。兄貴はすっごく変態で親戚の愛夏に向かって『ちゅーがしたい』とかいきなり言ってきて実際にするほ

ど変態なんだからつ。だからあんたみたいなどこにでもいそうな人間じゃ相手出来ないっ……だから、別れたほうがいい。いや、別れるっ。あんたみたいなひどい人間は……」

「ストップ、愛夏。こいつは中原さんじゃない」「え?」

俺は周りの人の中に知り合いがいないかどうか確認して胸をなでおろし隣の田畑を紹介することにした。

「こっちは俺の親友で悪友の田畑焔。世話になっていっていると言っか、俺が世話をしているとどうか何と言っか……」

「ねえ、新戸、このちんちくりんって本当に新戸の妹分? 礼儀がなつてないよ」

「お、おい田畑……」

「ち、ちんちくりんっ? 愛夏のどこがちんちくりんだって?」

愛夏の目に炎が見え隠れする。

「ん……全体的かな。中学生?」

「いや、俺らの一つ下だぜ?」

「へえ、気が付かなかった」

愛夏が皿に怒るんじゃないかと思ったが、耐えたようである。

「あんたと別に話すことはないから。兄貴、もう行こうよ。あっちで楽しもう」

「え? ああ」

愛夏が俺の手を引いたのでそっちへ向かおうとすると途中で足が止まる。

「どうしたの兄貴?」

「新戸、ちようど会ったんだし一緒にお祭りまわろうよ」

どうしてこういう時にそういう事言うかなあ。ほら、愛夏の目を見てあげなよ。消えたはずの火が再び灯されてるじゃないか。

「放しなさいよっ。兄貴は愛夏の兄貴なんだからっ」

愛夏は相手の挑発が三度の飯より好きなのである。

「おい、愛夏、そんなに引っ張るなって」

もちろん、愛夏の反対側にいる人間も似ている性質を持っていたりする。

「へえ、そっか。でももう高校一年生にもなつて『お兄ちゃん』とか信じられないから辞めたほうがいいよ」

「あなたには関係ないでしょ」

「うん、関係ないから早く新戸の手を放してよっ」

「あたしだって新戸って名字だもん」

「……風太郎の手を放してよっ」

実に不毛な争いは数分続けられた。その間、俺は周りの視線を生懸命耐えていたわけだけでも……そろそろ限界が近かった。

「……三人で一緒にまわろう。それなら文句が出ないだろ？」

「え、だって兄貴……」

「だってとかそういうのはなし。これ以上此処にいと変なうわさがたつからな。ほら、田畑も行くぞ」

「う、うんっ」

田畑の手を引き、愛夏の手を引っ張る。全く、俺の周りは協調性という奴を知らないのかね？

楽しむためにお祭りに来たのに疲れるとは思わなかった。

「兄貴、射的がやりたい」

「新戸……いや、風太郎、わたしもやりたいっ」

「はあ？……ったく、しょうがないな」

暇そうに店番していた茶髪の兄ちゃんにお金を払う。

「もう好きだけ撃つていいから」

何やら着かかっている表情の兄ちゃん言葉通り、二人は好き勝手撃ち始めた。ただ、腕の差は歴然のようで田畑はキャラメル箱やら何やら次々に撃ち落としていく。

「へえ、やっぱりうまいな」

「まあね」

そして愛夏の方はかすりもせず弾が通過してしまっている。

「愛夏、かすつてすらないぞ」

「う、うっ…」

「下手くそだねえ」

優越感に浸ったようにキャラメルの箱をちらつかせる田畑。たとえ相手が幼稚園児だとしてもこいつは本気で狙い撃っていた事だろ
う。

「う、べ、別にへたってわけじゃ…」

「ほら、手がぶれているからこうやってだな…」

後ろから身体を支えてやると愛夏は何故か優越感に浸った表情で田畑の方を見ていた。

「よそ見をするなよ」

「うんっ」

それでもやつぱり外れるものは外れるものでしょばいアヒルが一個手に入っただけだった。

「兄貴にあげる」

「俺は要らん」

「そっか、じゃあ愛夏が後生大事に持ち歩くよ」

どうせ三日後ぐらいには無くしてそうだけどな。

その後も勝負できそうなものを見つけては二人で争い続けた。金魚すくいでは金魚丼を完成させ、輪投げで店主の首にかけ、店主にじゃんけんで買ったなら一本増えるチョコバナナでは両方負けてドロ
ーとなった。

純粹に祭りを楽しめたんじゃないかと二人がけ用のベンチに無理やり三人で座りながらそう思った。両手に花の状態で羨ましいって？はは、冗談言ってる顔面にビニール袋いっぱい金魚ぶつけるぞ？

「愛夏、楽しかったか？」

「…兄貴と二人だけだったらもつと楽しかった」

「意外だったよ。風太郎と一緒に祭り行くのが楽しいなんてさ」

「そんな事言うぐらいなら兄貴と一緒にまわらないでよ」

「うーん、おまけが要らなかつたかなあ」

「ふん、お邪魔虫…」

「ちんちくりん」

愛夏の眉がつりあがったので俺は立ち上がる。

「さ、そろそろ帰るか」

「ん、そうだね。今日はぐっすり眠れそうだよ」

田畑も伸びをしながら立ち上がった。

「愛夏、帰るぞ」

「うん」

愛夏の手を引いて歩きはじめる。数歩進んで田畑が付いてきていないことに気が付いた。

「田畑、どうした？」

「いや、冷静に考えてみたら邪魔して悪かったかなあって。だから先に帰っていいよ。わたし少し遅れて変えるから」

田畑がそう言ったので俺は無理やり手を掴んで引つ張ることにした。

「あ、だから先に帰っていいってば」

「あのなあ、今のご時世…男が襲われる時代なんだぜ？」

「いや、大丈夫だって」

「根拠ないだろ」

「だって愛夏ちゃんが怒るだろうし」

「……兄貴が決めたのなら反対しない。愛夏、そこまで我儘じゃないから」

十分我儘である。

結局、両手に花の状態で田畑の家までやってきた。

「じゃあな。ちゃんと歯を磨いて寝るんだぞ」

「うん、おやすみ」

「おやすみ」

愛夏は無言で田畑の方を見ていた……が、その首がいきなり急降下。どうやら眠たいようで足取りも危ない。

「兄貴、おんぶ」

「やれやれ、しょうがねえな」

愛夏をおんぶしていると田畑が笑っていた。

「いい妹分だね」

「やらんぞ」

「要らないよ……けど、本当にありがと、風太郎。じゃあね」

今年の夏祭りはいつもと違って楽しかった。きつと、こんな楽しい事がずっと続いてくれれば平和なんだろうけどなあ。

夏休みまで残す行事は期末テストのみである。

第十五話：名実ともに

第十五話

テスト期間中の放課後、憧れの先輩である加賀美美奈子先輩と一緒に図書館でお勉強できる。そんな人間がいたらマジで羨ましい。

「風太郎〜ここがわからないんだけど」

「中州君に聞きなさい」

「今回の当番は新戸君ですよ」

現実にはピンキリのクラスメートと共に教え教ええられの勉強会である。勉強なんて本当は1人でするもんなんだけどな。田畑に教えなくてはいけないと言うプレッシャーの為、いつもの倍勉強する羽目になった俺の事を誰かいたわってほしい。

「ねえ、風太郎〜早く教えてよ」

「そこは……おっと、単純な計算ミスじゃねえか。最初の方のミスだけだぜ」

「え、そうかあ……このぐらいの計算ミスなら今回は満点採っちゃうかも」

「中州、あんなこと言ってるぜ?」

「誰しも一度は自分の事を特別だと思つたものです。そして、挫折を味わうのですよ」

そんな感じで茶化していたのが期末前日。その日の晩は愛夏の勉強を教えてやって寝たわけだ。

まあ、安定した感じで期末試験は終わりを迎えた。そして、数日経って結果が返ってくる。

結果報告としては中州、田畑共に全教科満点。俺が平均八十点程度といったところだろうか。

「へへ〜ん、どう?どう?すごいでしょ?惚れちゃ駄目だよ?」

「あ〜はいはい、すごいすごい。中州、特別視していた奴は挫折を味わうんじゃないのか?」

「次からですよ、新戸君。これから驕って勉強をしなくなるのです。じゃあ最下位だった新戸君は約束通りジューズを奢ってください」

「へいへい」

「あ、わたしは大きい奴じゃないと嫌だから」

「あたしも加わっていいかな？」

中原さんがやってきて机の上にテストの結果を置く。どれも九十越えばかりで俺の最下位はかわらないようだった。

「……はあ、じゃあ場所は中州の家でいいか？」

「構いませんよ」

途中お菓子とジューズを買って中州の家へと向かう。

「ねえ、風太郎君」

「ん？」

「中州君の部屋ってやっぱり本ばかり置いてあるの？」

「ああ、そうだな。それと結構大きなモニターがある」

「モニター？」

「中に中州の彼女がいるんだよ」

いまいち納得できていないような表情である。無理もないだろうな。

「それってどういう…」

「ほら、もう付くから実際に見たほうがいいぜ」

比較的大きな洋風の家。それが中州の家である。もともと、高級住宅街に建っているわけでもないので周りの家が小さく見えるだけなのかもしれない。泥棒とか結構頻繁にやってきているようだがこれがすごいことに一度も侵入されずお縄となっている。

「ただいま」

「お邪魔します」

「おじやましまーす」

「おじやましまーす」

中州の両親が帰ってくるのは夜遅く。休日に会った事があるけどとてもいい両親で此処の家に生まれてくればよかったと何度思った

事だろうか。ただまあ、放任主義者みたいなもので『お前が学びたいと思うのなら学べ、必要なものは買いそろえてやる。だらけた人生を歩みたいのなら勝手に歩むといい』そういつた事を中州に言ったそうさ。やっぱり中州じゃないといい点数とれないんだらうなあ。俺が此処の家の息子になつたらだらけてそうである。

階段を上つて部屋に案内される。

「しっかし、大きくて綺麗だよなあ」

「うん、風太郎の部屋つてば汚いもんね」

「うるさいわい」

「はじめてみたけど本当、整頓されてるね。あ、あれが噂のモニター？カメラもあるね」

何も表示されていないモニター、そしてカメラを中原さんが指差す。中州が俺の事をじーっと見ていた。

「新戸君、出来ればそういう事をあまり他言して欲しくないのですが」

「あゝ……悪い」

「もう行ってしまったので仕方ありません」

「すまん」

「やーい、怒られてやんの」

田畑にからかわれても反論は出来ない。クラスの九割がその事実を知っているが（田畑が言いふらした）それでも中州は秘密にしておきたいらしい。クラスの連中はそれを尊重している為、それ以上の秘密漏えいは守られている。

「このモニターは外国にいる僕の許嫁の部屋とつながっているのです」

「え？許嫁つて…子供のころから結婚する人が決まっているあれ？」

「はい。からかわれるのが嫌いなので秘密にしているんです」

「今また風太郎が広めちゃったけどね」

「元はお前が秘密をばらまいたんだけどな」

「程度はどうであれ、秘密をばらしたという事実には変わりません」

よ

「すまん」

「ごめん」

中州に睨まれて頭を下げる俺と田畑。まったく、中州も友達を選ぶべきだ。

「ねえねえ、ジュディーちゃんと話さないの？」

「ジュディー？」

首をかしげる中原さんに俺は軽く説明する。

「金髪碧眼の可愛い女の子なんだよ。でもまあ、ひきこもりらしい。うん、海外にも引きこもりっているんだな」

「新戸君、何勝手にしゃべっているのですか」

「あ…すまん」

謝りっぱなしである。どうせなら俺の家にいけばよかったかな。

「田畑さん、今日はジュディーの部屋とはつなげませんよ。嫉妬深い性格なので今度は中原さんの事について詳しく説明しなくてはいいけません」

「そっかあ、残念」

田畑が最初にカメラに映った時はおもしろか…いや、とても大変だった。鋭利な刃物を取り出して部屋を出ようとするジュディー…しかし、すぐに戻ってきて憤怒の表情を俺達に見せてくれた。それから約一時間ほど田畑の事を説明し、何とか収まってもらったのだ。いつも冷静沈着な中州が慌てまくっていたから面白い以外の何物でもなかった。

「あたしがカメラに映らない場所にいれば大丈夫だと思うけどどうかな？」

「無理ですよ。ジュディーはすぐく勘がいいのです。聞いてみたところ女の勘だそうです」

女の勘…ねえ。そこはちょっと納得できるかもしれない。

「ああ、そうだね。ちよつとジュディーちゃんの顔を見たかったけど恋する女の子の勘ってすごいからやめておくよ」

暗に俺に対して言われているような気がするのは俺の心がやましいからだろうか。

「そうしてもらえると助かります」

「ぼちつとな」

「おい、田畑……」

モニターに金髪少女が現れる。下着姿の女の子でさすが海外、レベルの高い身体をしていらっしやる。

「風太郎、久しぶりね。それに焰も」

「やつほー」

「ひさしぶり」

「あらあなた……その女の子は……誰？」

まあ、何だろうか。その後はカメラに映る中原さんを見て激怒。

一生懸命説明する中州を俺と田畑はカメラに映らない場所からすく心配しながら見守っていた。

「あ、このお菓子おいしいねえ」

「新商品だったからスーパードとか行けばまだ売ってるだろ」

「今度買ってみよーっと」

スピーカーから聞こえる怒号は恐ろしいもので中州の身の破滅が近付いているような気がしてならない。

「新戸君、助けてくださいっ」

「はあ？俺が？」

「ええ、早くこちらへ来てください」

言われて中州の隣へと赴く。中原さんと腕を組まされた。

「ジュディー、この二人が恋人同士なので僕とはあまり関係が無いのです」

「……風太郎本当？」

「えーつとだな……」

「本当ですっ」

中原さんは胸を俺に押しつけながら宣言した。そんな俺らを見ながらジュディーは黙り込んでため息をつく。

「そうみたいね、あなた、ごめんなさい」

「やっと信じてくれましたか……」

力なくその場に座り込んだ中州は老けこんで見えた。お疲れ様である。

中原さんとジュディーが一緒にしゃべっている中田畑が俺に近づいてきた。

「ねえねえ、名実ともに恋人同士になっちゃったようだけど本当にどうするの？」

「どうするって……」

「自然消滅なんて限りなく無理だと思っよ。まだ何とかなるって思ってる？」

「……」

楽しそうに笑う中原さん。よく思えば悪い子じゃないし、むしろいい子だ。いや、だからこそ俺のような優柔不断な男には不釣り合いのほずである。

「ど、どうにかするさ」

「お、言ったねえ。期待してるよ」

田畑がジュディー達との会話に参加しに行ったようなので俺は中州と話すことにした

「大丈夫か？」

「ええ、今回は結構早く終わってくれましたからね。これも新戸君のおかげです。しかし、田畑さんの保護者である新戸君がしっかり見てくれていなかったからあのような事が起こるのです」

「別に俺はあいつの保護者じゃないが……すまん」

「今回は助けてもらいましたから何か困った事があつたら言ってください。その時は出来る範囲で新戸君を助けますので」

田畑が俺の事を助けてやると言ってくれるより、やはり中州の方が頼りになる。今後は中州の方にも相談した方がいいかもしれないな。

第十五話：名実ともに（後書き）

祝、アクセス数十達成。予定としては夏休みが終わるぎりぎりってところで終了なんですがね、予定は未定ですからわからないものです。しかし新戸風太郎という男は確実に追い込まれていつてる感があって残念です。中原美奈子と仲良し子良しになってしまうのか、それとも加賀美美奈子と一緒にいることができるのか、はたまた違う未来が待っているのか、どうなんでしょうね。

第十六話：タークホース

第十六話

学校が夏休みになっても部活動を盛んにしている生徒たちは学校へ、それ以外は特に制約もなく自由に過ごしている。

俺は後者の方で部活はやっていない。第一の理由に面倒だ、第二の理由も面倒だ、第三の理由が早く帰れないからである。

どうでもいい事だが、夏休みの過ごし方なんて人それぞれである。さつき言った通りの部活や、普通に勉強をして過ごしたり、家族や友人たちとどこかへ遊びに行くかもしれない。ああ、中には一人暮らししている兄弟やらが家に帰ってきたりもするかもな。

俺も何処かに遊びに行く部類だが、一人である。

夏休みの宿題もある程度終わらせて一人で市民プールへとやってきた。それなりに人も多く、泳ぐにはちと狭い場所である。

パンツを着用し、プールサイドへと移動。見知った顔が絶望的な表情でプールを眺めていた。

「田畑、不景気そうな面してるな」

「ふ、風太郎っ……」

何を見ているのだろうかと先ほどまで田畑の見ていた場所を視界に入れようとすると田畑が俺の手を掴んで引っ張った。

「お、おい……何だよ？」

「風太郎にちょうど用事があったんだよ。ちよつと着替えて付き合っつてよ」

「別にいいけど、お前……そこは……」

「きゃーっ……」

「失礼しましたあつ」

田畑のアホめえ……なんで俺を女子の更衣室に連れて行くんだよっ。

監視員を何とかまいて肩で息をする。

「このクソ暑いのになんでプールに入れず俺は走ってるんだよっ」

「それは風太郎が女子の更衣室に入ってくるからだよ。全く、油断も隙もあつたもんじゃないね。スケベっ」

「あのなあ……お前が連れて行つたんだろ？」

「そうだった？」

全く、都合の悪い事はすぐ忘れるんだから困つたぜ。

ファーストフード店に入って一息つく。適当なメニューを選んで待っていると田畑が先ほどのような暗い表情になっていた。

「何だ、何かあつたのかよ？」

「え、ああ……ちよつとね。わたしの事じゃないんだけどすつごく信じられないことがあつたつて言うかさ……」

歯切れの悪い田畑である。いつもは口にガムテ付けてもしゃべるようなやつなのにどうしたんだろうか。

番号を呼ばれたのでメニューを取ってくる。やはり田畑の表情は明るくならなかった。

「田畑、俺のポテトやるから元気出せよ……って、許可を出す前から勝手に食つなよ」

「……うん、ありがとう」

「つたく……そういえば田畑と会って一年ぐらいになるか」

「ん、ん……そうだった？」

「そうだよ。思えば一年前に……うーん、正直に言つてちよつと信じられないやつに出会つたなと思つたぜ」

「え？そうかな？わたしは新しい友達で来てよかったなーぐらいだったよ」

一年前、本当に馬鹿らしい事をきっかけに田畑と出会つたもんだ。それじゃあ回想スタート。

外に出て何処か涼しい場所へと行こうかと考えたのが十分前、外に出てきて後悔したのが六分前、そろそろ日射病か熱射病で倒れそ

うなのが今現在だ。

「あちい〜……」

中州の家にも行って涼もうか、それとも大人しく図書館に夕方まで引きこもったほうが利口なのか、どっちなんだろう。

どっちに行っても勉強しなくてはいけない雰囲気になるだろう。やめておこう、それならコンビニに行ったほうがまだましである。

「この暑さはどうにかならないもんかねえ」

よるよるしつつも、何とか正気を保っている俺の耳に誰かの足音が聞こえてくる。聞くところによるとどうも走ってきているらしい。まるで誰かを追いかけているようだった。

「この財布ドロボーっ返しなさいよっ」

どうやら、俺を追いかけていたらしい。しかし、追いかけてくるような知り合いはいない。

ちょうど背中の中あたりに何か直撃。俺はほんの一瞬解き放たれた籠の鳥となった……そして、墜落した。

「あいたたた……あんた、いきなりなにすんだっ」

胸倉つかまれて俺を睨んでいるのは中性的な顔立ちの人物だった。シヨートカットがさらにポイントシユとやらに貢献している。

「だから、財布返しなさいよっ。ほらほらほらほらほらほらほらほらっ」

俺と同じくらいの身長のため、ちよつと上の方に持ち上げられ揺さぶられると足が宙に浮き、気分が悪くなる。馬鹿力め…。

「おいおい、冷静になろうぜ？」

暑くなると人間、判断力が無くなるものだ俺の父ちゃんは言っていた。もういい年した大人なんだから暑さぐらいで叫んだりはないとも言っていた。

『ちつくしよっ暑いんだよ馬鹿野郎　っ。ちよつと風になってくるっ』

そういつて自転車こいで川に落ちたのが一昨日の事だ。

そんな恥ずかしい大人にならない為にも物事悟っちゃってますっ
て言う今はやりの高校生を目標しているのだ、俺は。

「冷静に、穏便に済ませようぜ」

「はあ？」

「いや、はあ？って言いたいののはこつちなんだよ。あらぬ疑いをか
けられているんだからな」

「わけわからない事を言わないでよっ。ほら、来なさいよっ」

そのまま警察に連行されるのかと思ったら連れてこられたのは公
共の女子トイレだった。

「おいおい、ここは女子トイレだぜ？」

「何？あんた、わたしに男子トイレに入れて言うの？身の潔白を
証明できる自信があるのならついてきなさい、そうじゃないなら警
察呼ぶから。どの道、わたしの財布を持っていたら問答無用で警察
に女子トイレにはいつていたとか罪も重なるから」

とんでもない奴である。

「じゃあなかったらどうするんだよ？変な言いがかりつけたお礼は
ちゃんとしてくれるんだろうな？」

「もちろんよ」

正直、てつとりばやく警察呼んでもらった方がいいんだけどな。

しかし女子トイレで何をするのだろうか？とりあえずついで行くこ
とにした。

個室に二人で入る。今から何をされるんだろう？

「脱ぎなさいっ」

「は？」

「だから、脱げって言うてるの。隠し持っているんでしょうからね」

「ねえってばっ」

「抵抗するなんてますます怪しいわねえ」

誰だつて抵抗するだろ。

結局、舌打ちしながら上を脱いだ。

「ほら、どこにもないだろ？」

「下も脱ぎなさいよ」

「……わかったよ」

ズボンを脱ぐともうパンツ一丁。うう、何の罰ゲームだよ。

「両手を上に向けて、ジャンプしなさい」

「へいへい」

俺のズボンをあさりながら（入っているのは所持金千円程度の財布、そして携帯だけ）そう指示する。

「ほら、何も出てこないだろう？」

「……脱いでよ」

「何を？もうこれ以上脱げるものは何も無いぞ」

「股の間とパンツのところであたしの財布が蹂躪されている可能性があるわっ」

素早く伸ばされる女の腕。俺は素早く迎撃するため両手を動員する。

「ねえよっ、ねえってばっ」

女にトイレに連れ込まれた揚句、剥かれるとか冗談じゃないっ。

お嬢に行けなくなってしまうっ。

互いの攻防が続く、数分が経った。暑い上に狭い空間に二人いるせいで湿気がすごい。

「じゃ、じゃあこうしましょう」

「なんだよ？」

女は手を放し、俺も警戒しつつ引き下がる。

「パンツは下げないから両手を上げなさい」

「信じられるかよ」

「ほら、私も片手を上げるから。片手で脱がそうとしても腰を引かせれば大丈夫でしょう？」

「……ああ」

言われた通りに両手を上げる。こいつ、何をするつもりなんだろっ。

「じゃあ行くわよ」
「は？」

すぐに想像出来た人はすごい。奴は臆することもなく、俺の股間を片手で握りしめたのである。

「おうふっ」

「……ないわね？」

散々揉みしだいた後、女は考えているようだった。口の中にあるんじゃないかという思考にたどりついたら俺はどうなってしまおうのだろうか。それとも、解放するかどうか悩んでいるのだろうか。

突如、女の携帯電話が鳴りだし、それに出る。俺はちよっと痛む股間を抑えて情けない事に中腰になっていた。後で滅茶苦茶になっていないか確認しないといけないな。

「もしもし？え？財布そっちに忘れていたって？あ、あゝ、玄関に落ちてたんだ。うん、うん、ありがと、じゃあね〜」

「俺は無実だったんだろ？」

電話を終えた女に向かって尋ねる。

「うっ、うっ……」

「そうなんだろ？」

「じゃあ約束通り言う事を聞いてもらおうか……ほら、しゃぶ……何でもない。」

「あなたの顔は二度と忘れんっ。そこをどいてくれ」

女を突き飛ばし、俺は外に出る。

結構綺麗なOLさんと鉢合わせした。

「こ、こ……女性用トイレですよ。ぱ、パンツ一丁で何しているんですか？」

こっぴどいときは変に怖気づいてはいけない。堂々としていなくて

はいけないのだっ。そういうわけで俺は両腰に手を当てて堂々と仁王立ち。

「見てお分かりにならない？男が女子トイレにて個室からパンツ一丁であなたの前に現れた。つまり……」

「つまり、へ、変態ですかっ。きやーっ、誰かっ」

その後、俺はクソ暑い中悲鳴に追われて家に逃げ帰ったとき。

俺が田畑の名前と顔を知ったのは二学期になってからだっ。放課後、校舎裏に呼び出されて友達になってほしいと言われたのだ。てっきり告白されるもんだとばかり思っていた俺は肩すかしをくらって数秒ばかり呆けた記憶がある。

「風太郎ってばわたしの顔を忘れてたもんねー」

「そりやあなあ」

「二度と忘れないって言うていた割にころっと忘れてたんだもん。学校で鉢合わせしちゃった時は心臓が口から出てくるかと思ったよ。あのドキドキを損したなあ」

すっかり氷の溶けてしまったジュースを口に運ぶ。うん、薄い。

「あれから俺はお前にずっとまとわりつかれてるからな。おかげで下着泥棒の汚名までついちまった時期があっただぜ？」

「あははは〜ごめんごめん」

「全く……」

また薄くなつたジュースを口にする。なんと口にしたところで味は変わらない。

「えーっとさ、あの時の何でも言う事を聞くって今でも有効だから。今だから言っけど、あの時、やらしいことされるって思ってた」

口に含んだジュースは田畑の顔へと直撃した。

「あ、悪い」

「悪いじゃないよっ」

「ほら、拭いてやるから……」

顔拭いてやると何故だか幸せそうな顔をしていた。変な奴だ。

「あのさ、風太郎の事を想っているから言うけど……二学期始まるまでに結論出なかつたら別れたほうがいいよ」

「なんだよ、わかっているってば。頃合いを見計らって中原さんに言うよ」

「ううん、別れるのは会長さんとだよ」

「はあ？なんでだよ？」

土砂降りの中、お天気おねえさんが『今日はいい天気ですね』というぐらい違和感があった。

「理由は……いえないけどさ」

「あのなあ、たとえ理由があってもはい、わかりましたって言えるかよ。大体、お前は俺を応援してくれるんじゃないのか？」

激高しかけた俺の手を奴が掴む。冷房が効きすぎているのに奴の両手は熱かった。

「うん、応援した……いや、したかったんだよ。でも、それでもわたしは風太郎の味方。もし、結論出せなくてわかれなかつたらわたし、実力行使で行くから」

「実力行使い？」

武力介入でもしようっていつのか？俺が、俺たちがお邪魔虫だって感じて？

「うん、二股してるってばらす」

「た、田畑お前……」

味方じゃないだろ、それは。一番ばれちゃまずい相手にそれを言うのは絶対に駄目だ。

「もうひとつ切り札……」

「まだあるのかよ」

「ん、これ……」

田畑焰の唇が俺の唇に当たる。慌てて離れ、自分の唇を指で触る。

「……お、お前なあ……何するんだよっ」

「いいじゃん、別にずっといるんだし。これを言っし、生徒会長の前でするからね。じゃあ、わたし行くから」

田畑の顔が赤いのはなんでだろう。きっと、俺の顔も真っ赤のはずだ。それから約一時間俺はそこに居続けた。店員が迷惑そうな顔をしている事に気づきようやく出ていったのだ。

家に帰る途中も頭の中では田畑の表情が脳裏によぎる。

「友達になってほしいって……いや、俺の考えすぎか」

とりあえず、今のままの状態ではいけないだろうな。どうにかしなくてはいけない。

第十七話：男の悩みは尽きません

第十七話

男が困っているのだ、誰に相談する？ママか、先生か、それとも行きつけのバーのママか……いや、どれでもない。男に相談するものだ。ナニが問題ある？病院に行ってお医者さんに相談しろ。

そういう理由で俺は許嫁のいる中州に相談することにした。これこれこういった事情で相談したいのでファミレスに来てほしいと呼んだのだ。来てからすぐにパフェなんか頼みやがって……しかも、新戸君が払ってくれますよね？とか……相談しているほうだから文句なんて言えないけどさ。

明日は学校に行かなくてはいけない。しかも、生徒会選挙があるのだ……。俺は立候補しないけど、中原さんがするとかしないとか……とりあえず、中原さん、先輩、そして田畑に出会う確率は非常に高い。

「中州、俺はどうすればいいんだと思う？」

中原さんの事、先輩の事、そして田畑がキスしてきた事を包み隠さず話した。あした、学校だし……中原さんの前で田畑と会っちゃったら俺はどうなってしまうのか想像もできない。

外の方が若干うるさいようだが、そんな事は関係ない。俺の耳は今、中州の言葉だけしか聞こえない様に集中している。貴い意見を待っている、さつさと口を開いてくれた。

「怪我をしたとき、すぐに処置をするのが基本です。新戸君はちょっと処置するのが遅すぎたのではないでしょうか？」

「じゃ、じゃあ俺はどうなるんだ？」

「それはまあ……運任せという言葉がお似合いですかねえ」

「……そうかあ……」

意外とどうにかなっちゃうものかもしれないし……いや、甘い考えかもしれないな。

考え込んでいると中州がテーブルを軽く叩いていた。

「なんだよ？」

「外、ここから見える路地裏で不良が一人、集団戦で一方的に殴られていますよ」

「はあ？そんなの放っておけよ。不良同士のけんかだろ？そんなのに首をつっこんでいられるかよ」

「相手が不良だろうと助けなくては生徒会長に嫌われるのではないでしょうか？」

「別に……先輩は見てないだろ？」

「見ていない、だからこそ助けなくてはいけません。もつとも、僕が見ているので後で告げ口しようかと考えていますけどね」

心の中で舌打ちし、立ち上がる。全く、変に正義感のある面倒な友人だ。しかも、ついてこないし……。

基本、普通の人間というのは不意打ちに弱い。不意打ちに強い奴がいたらそいつは小さい頃から特殊な訓練を受けさせていること間違いないのである。

一人蹴飛ばし、俺は中指を立てた。

「何だてめえ？」

そういつた奴の顔面に遠慮なく拳を叩きこむ。残った奴の胸倉をつかみ、俺はにらみをきかせる。

「てめえら、誰だかしらねえが警察に連絡させてもらったからなあ。見たところ高校生のようだが……ははあ、暴力事件か。面倒なことしやがって。このファミレス付近は俺らの縄張りなんだよつ、余所もんがちよろちよろ目障りなんだよつ。まあ、俺にこれ以上殴られたくないんだつたらお前らが殴っていた奴、置いてけ」

「す、すんませんっ。お、おいお前ら行くぞっ」

逃げて行く途中、あいつらが中学生だと言っ事に気が付いてため息が出た。

とりあえず怪我した男性をファミレスへと連れて行き、腰かけさせる。ちよつとざわついたがすぐに静かになった。

「あのー、大丈夫ですか？」

「ああ、なんとか…」

おしぼりで顔を拭こうとしたら自分でできるようで手を差し出される。

見た目がチャライ割に意外と普通の口調だった。そして何気にイケメンである。ちょっとでいいからそのイケメン度を分けてほしい。「いやー、ここらも変わったんだね。まさか目があったただけでここまでやられるとは思わなかったよ」

「そうなんですか？」

「ああ、やはり茶髪にしてピアスはやめておいた方が良かったな。彼女と待ち合わせっていうことで気合を入れてきたんだけどなあ…」
…ついてないよ」

鼻血も拭きとり、やっと見えるような顔になった。それで何処かを見た事があるような顔だと言ふ事に気付いた。いや、ここ最近会ったとかそういう感じではない。

中州もそれに気が付いたようで口を開こうとすると声をかけられる。

「あ、けんちゃんまつたあ…って、どうしたのその怪我？」

「ああ、結衣ちゃん」

結衣ちゃん、といわれた人物を見て俺と中州は口を開けていた。何だろう、ちょっと失礼だけど結構太めなのだ。ふつくら、じゃなくてデブなのだ。およそ目の前の人物の彼女とは思えないほど不釣り合いなんだよ。そして、どう見ても歳が違うように見える。目の前の男性は二十代だろうけど、女性の方は間違いなく三十以上だ。「結衣ちゃん、悪いけどこの人たちと合い席でいいかな？さっき襲われていたぼくを助けてくれた人たちなんだ」

「え、あー、うん、あたしはあ、かまわないよあ」

しゃべり方もうざいつ。

「じゃあ、あたしはあ…ちょっとお手洗いに行って来るねえ」

「うん、いつてらっしやい」

これは困ったことになったぞと俺は中州の方に視線を向ける。中州も俺の方を見ていたようでお互いにとって息をついた。

「似合わないカップルだって思っただろ？」

「え、い、いや…」

「いや、いいんだ。よく言われるからね。でも彼女の前じゃそういうのはやめてほしい。傷つくからね」

「あ、はい」

「あの、僕達が御邪魔なら出ますけど？」

「いやいや、助けてもらったお礼もしたい。ここはぼくが払うから好きに食べて構わないよ」

人助けってたまにはいい事があるもんだな。まあ、そんなに高いのは頼めないし、もう何か頼もうとも思わないけどさ。

見知らぬ人と何を話して間を持たせようかと考えていると中州が喋り出した。

「あの、もしかしてあなたは羽津中学校の生徒会長をやっているんですでしたか？」

「え？ああ、やってたよ」

「ああ、だからどこかで見たなあって顔だったんだ」

「もしかして君たちは羽津中学の生徒さんなのか？」

「いや、その中学出身の羽津高校生です」

「なるほど…」

何か話したほうがいいのかもしいが、会話はそこで途切れてしまっていた。はやく彼女さん帰って来ないかなあと思っていると男性は両手を俺達に合わせてくる。

「じゃあOBの相談をつけてくれないかな？」

「俺たちもOBなんですけどね」

「じゃあ先輩として…実はね…」

声のボリュームを一段下げる為に必然的に俺たちは男性の方へと顔を近づける。

「ぼく、今…二股状態なんだ」

「え？」

「それはまた……」

中州はあきれたような顔をして何故か俺を見ていた。類は友を呼ぶんですね、最低ですよという意味の視線に間違いない。

「それがどうかしたんですか？」

「いや、ねえ、これがどうすればいいんだろうかと悩んでいるんだ。何だろう、今の彼女とは小さい頃からの付き合いで勘づいているっばいし、僕も成り行きで後の方の彼女を受け入れてしまったんだけど……やっぱり、結衣ちゃんの方がいいんだ。後にできた彼女ともこの前も一緒にプールに遊びに行ってしまった。本当はすぐに断るつもりだったんだけど楽しそうな彼女を見るとどうしても切りだせなかつたんだ」

「……何か言つてあげてください」

この屑やるうつ、てめえなんてさっきの連中にやられちまっていればよかつたんだ……と言いたいところだが、ブーメランで俺へと戻ってくることに間違いない。

「ん、んゝそれならしょうがないんじゃないんですかねえ」

中州は頭を押さえてため息をついた。

「新戸君……」

「ん？新戸？」

繁々と俺の顔を見て首をかしげる。

「もしかして……新戸風太郎君かい？」

「はあ……俺の事を知っているんですか？」

「あ、いや……ごめん。今のは忘れてくれ」

男性は慌てたようにそう言つて愛想笑いを浮かべている。

「ただいまあ」

間延びした声が聞こえてきて、温度が少し上がったような気がした。男性の横に結衣と呼ばれた女性が座る。

「何の話してたのお？」

「え、ああ、助けてもらつたお礼についてだよ。ね？」

「嘘ばかりい、どうせ新しい彼女の話でもしていたんでしょ？」
何、鋭い人だな……。

「そ、そんなことないよ」

「あたしにはあ、わかるもん。けんちゃんがそっちの子がいいって言うのならあたしい、別れるからさあ」

「嫌だよっ、ぼくは結衣ちゃんがいいんだっ。今度家を出るときは家族に結衣ちゃんの事をちゃんと紹介するつもりなんだっ」

「けんちゃん……」

ひしと抱きしめあっている二人を俺たちは手持無沙汰に眺めていた。あゝ、全世界のカップルに不幸が訪れねえかなあ。

「ごめんね、結衣ちゃん。ぼくは、ぼくは君との幸せのために他人を傷つける事を迷わないよっ」

「うんっ、あたしたちの仲を引き裂こうとした女にはびしっとしてやってよっ」

この男性の二人目の彼女は気の毒だなあと思いつつ、俺と中州は立ち上がった。

「あ、もう帰るのかい？」

「ええ」

「お邪魔のようですし……」

「気にしないでくれ」

見ている心がすさむだけだ。いや、俺には彼女いるし、中州には許嫁がいる。でもまあ、幸せかと聞かれたら不幸のどん底にいるような状態なので羨ましくて嫌なのだ。

「じゃあ失礼します」

「御馳走様でした」

結局、俺は何をするためにファミレスにやってきたのかいまいちわからないままだった。

「そういえば明日は学校に行かなくてはいけませんね」

「そうだよ、だから中州に今日相談したんだよ」

「しかも、生徒会選挙ではありませんか」

「どうすりゃいいんだよ、俺。中州に相談したつもりが、無駄な時間ですごしただけじゃねえか」

落ち込む俺の肩に中州の手が載せられる。

「大丈夫です、新戸君」

「中州……」

「何も持っていない状態に戻るだけですよ」

「……………」

今度、ジユディーちゃんにエロ本を見せよう。うん、徹底的にお仕置きしてもらわないと俺の心が晴れない。

第十七話：男の悩みは尽きません（後書き）

たまにはあとがきっぽい事をやろうかなと思います。この小説は元『My Room Guardian』で投稿するつもりでした。主人公のもとへ親戚の引き籠りがやってきてハートフルなお話の予定だったんですけどね。なぜか今のような話になってます。少々粗雑ですが、終わりの方も頭の中では出来ていますので終わりも近いですかね。

第十八話：裏切り者の長い一日（前編）

第十八話

登校してきて気が付いた。俺、今日サボればよかつたんだよつ。

「兄貴？どうしたの？」

一緒に学校に来ていた愛夏が俺の手を引く。

「え、ああ…いや、なんでもない」

「早く行こうよ」

今日の生徒会選挙、中原さんが生徒会長に立候補している。一応、飛び込みで立候補オーケーなんだけど、そんな事をするおかしい奴はいないし面倒な事をしよい込みたいと思う生徒はそこまでいないだろう。

校門を過ぎると田畑が手を振っていた。

「おはよ〜」

「お、おう、おはよう」

「ん〜？元気がないなあ」

寄ってくる田畑をつい、避けてしまつ。その光景を見て愛夏がにやけていた。

「へへ〜ん、兄貴はあんたのこと嫌いだったさ」

「そんなことないもん。まあ、愛夏ちゃんも改めて見たら可愛いじゃないの。今後ともよろしくね」

「え、ええ…」

差し出された手をまじまじながめ、結局そつぽを向いた。

「あらら、ざーんねん。わたしつてば愛夏ちゃんと仲良くなるうつて思ったんだけどなあ。手始めに風太郎とすつごく仲良くなるうつて決めたんだよ」

「なかよくう？兄貴、とうとう頭がおかしくなつたんじゃないの？」

こつちの方を見てくるが俺は何も知らない、関係ない、今すぐこつこで消え去りたい。ああ、忍者になりたい。

「とりあえず此処で突っ立っていると邪魔になるから急ごうよ」

「お、おう」

「……」

愛夏が疑いの眼差しをこちらへ向けてくる。極力こちらを見ない様になっていると見知った顔にあった。

「あ、風太郎君おはよう」

「おはよう」

「うわぁ、朝から両手に花かぁ…妬けちゃうな」

「は、はは……」

「むぐう……」

既に愛夏の口は両手でふさぎこんでいる。田畑も協力してくれているのか、中原さんの目の前に立って話をそらすつもりらしい。

「中原さん、生徒会長目指してがんばってね」

「うん、対立候補もないから楽勝かな」

「そうだな、がんばってくれよ。じゃ、俺たちは教室に行ってるから」

愛夏を抱え込んだまま曲がり角を素早く曲がる。

「ふい〜」

「危なかったね」

「ああ」

「ぷはーっ、ちょっと兄貴っ。愛夏はあの女に一言言ってやらないと気が済まないんだってばっ」

入れやすい現代少年少女かよと思いつつ、その肩に触れる。

「落ちつけよ」

「そっだよ、愛夏ちゃん」

もう片方の肩に田畑が手を置き愛夏の顔に接近。

「な、何？」

「……ちよつとき、愛夏ちゃん借りていくね。色々と言いたい事があるからさ」

「ああ…そんなにいじめてやるなよ」

「別にいじめないよ」

愛夏は抵抗するつもりのようなのだが、何やら耳打ちされると静かになった。騒がなければそれでいいかと俺もその場を後にする。

「……一応、先輩に会いに行っておくか」

先輩の生徒会長としての仕事は今日で終わりだ。三年生だし、進路も決まっているだろうから勉強し始めているんだろつなあ……。

生徒会室前までやってきてちよつとだけ扉を開ける。

「あら、いらつしやい」

「浅野先輩……って、ほかの生徒はいないんですか？」

「会場の準備」

パイプ椅子に腰かけている浅野先輩はお茶を注いでくれと顎でポツトをしゃくつていた。言う事を聞くしかない俺は大人しくそれに従う。

「どつぞ」

「うん、よろしい……。それで、何しに来たの？」

「いや、ちよつと……先輩の顔を見に来ようと思って」

「あら、わたしの？嬉しいわあ」

「あ、いや、浅野先輩はついでです」

「……帰つてよし」

さあさあ、部外者は帰つた帰つたと先輩に追い出されそうになる。しかし、先輩は俺を追い出すのをやめた。

「……あのさ」

「何ですか？」

「妙にあなたの生徒会長さんが上機嫌なんだけど何かあったの？」

「いや、別に何も。ほら、先輩達って三年生じゃないですか。だから遊びに誘うなんて愚かな真似はしてませんよ」

「……」

ますますこれは怪しいなと呟いている。

「何かあったんですか？」

「いや、何もなかったけど……妙に最近嬉しいって感じの顔なのよ。」

うーん、確かに海外の学校に留学だか進学だか決まったとか何とか言っていたからそれが原因……にしては違う感じだし……君とは超遠距離恋愛か」

浅野先輩が首をかしげているが、まあ、海外の大学だか何だかに進学が決まったのならお祝いすべき事なのだろう。

「おはよう」

「あ、おはようございます」

「に、新戸…来ていたのか」

俺を見るなり先輩は後ずさった。軽く拒絶されたみたいで悲しい。

「……ねえ、生徒会長さん？」

「どうした？」

鞆を机の上に置き、何やら書類を取り出していた。次の生徒会長の為のスピーチや他にも色々と書かれている。今日の選挙のためのものらしいな。

「やけに嬉しそうな態度だったけど何かいい事でもあったの？」

先輩の動きがぴたりと止まった。

「別に、何も。新戸、もう教室に行ってくれ。悪いが…忙しいんだ」

「わかりました」

邪魔になるんじゃないだろうかと生徒会室を後にする。浅野先輩が普段他の生徒に見せているような真面目な顔つきになっているのは驚いたが……これから何かしらの作業があるからだろうか？

教室に向かうと中州と田畑が話していた。

「おはようございます」

「おはよう、田畑、さっき愛夏に話した事って何だったんだ？」

「え？ああ、あれねえ…あれは…」

「愛夏って誰でござるか？」

クラスの男子が女子っぽい名前を聞いて寄ってくる。

「えっとねえ、風太郎の妹分らしいよ」

「妹分でござるか？」

「おお、愛夏殿でござるか。懐かしい」

「どうせ新戸みたいな顔つきでござろう？見るに値しないでござるよ」

「女版新戸でござるか……拙者、気持ち悪くなったのでトイレに行つて来るでござる」

「しつづれない奴らだなあ……俺の愛夏はすつごく可愛いんだぞつ。ほら、見ろつ」

俺は携帯電話に保存されている愛夏写メを連中に見せる。

「お」

「おお、めんこいでござるつ……心が洗われるでござるよお」

「おお、せ、拙者、心が現れたでござるよ……ぐえへつへえ」

「ネクタイよし、髪型よし、イケメンスキル完備フル武装の俺、いつきまーつす……お兄さん、愛夏さんを僕にください」

「きさまらみたい男にはやらんつ。ほら、散れ散れつ」

男子どもをさっさと追い払う。まったく、こんな連中に愛夏をやるるかよつ。

「相変わらず愛夏ちゃんにお熱なのですね」

「お熱？んなわけないだろ。妹分は大切にするのが人間つてもんだ」

「んー、兄妹いないからよくわからないや」

「僕もです」

「俺も一人っ子だけだな」

その後、ちよつとばかり兄弟談義で盛り上がっていると中原さんがクラスに入ってきた。

「みんなおはよーつ」

「おはよーつ」

「今日はがんばるので、演説ちゃんと聞いてねつ」

「おー」

「寝ちや駄目だよつ」

「無論でーす」

「とくに風太郎君つ」

「え、俺？はいはい心得てますよ」

「うん、それなら大丈夫つ。あたし、がんばるからつ」

朝のHRが終わるとすぐに体育館へと移動。そしてその場で演説を聞いて選挙がおこなわれるのだ。対立候補がいなければそのまま拍手多数で決定するので大体が体育館で終わる。もし、対立候補が出た場合は教室に戻って投票となる。

まだ始まるまでもうちよい時間があったので再び雑談をしていると（スリッパは右からか、左からか）中原さんがやってきた。

「ねえ、風太郎君。今日、終わったらあたしの家に来ない？」

「中原さんの家に？」

「うん」

「別にいいけど」

「僕もいいですか？」

珍しく中州が自己主張。どうしたんだろうか。

「うーん、しょうがないなあ…もしかして田畑さんも来たいとか言う…よね？」

「ううん、わたしはいい。愛夏ちゃんと用事があるから」

田畑はこつちを見てウインクをする。なんだか恥ずかしくなったので俺はそっぽを向いてしまった。

ちよつと怖い顔で中原さんが田畑の事を睨んでいる気がしたけど…気のせいだろう。

その後、すぐに朝のHRが終わり体育館に移動することになった。

「新戸君、鞆間違えていたわよ」

「あ、すみません」

移動しようとしたら浅野先輩が俺のクラスにやってきていた。そして、俺の鞆を持っている。あれ、俺ってば間違えて浅野先輩の鞆を持ってきちゃったのか。

浅野先輩に近づくと腕が首にまわされた。

「え？」

「すぐに終わる。先に行つててもらつて」

「何してるの風太郎？先に行つちやうよ」

新戸の奴、うらやましいでござるゝとか聞こえたような気がするが空耳だろう。

「おう、すぐに追いつくから行っててくれ」

教室には当然、俺と浅野先輩だけが残った。

「で、どうしたんですか？ほっぺた、張り手を喰らったように赤くなってますよ？」

「んー、まあちょっとあつてね」

結構効いたわと浅野先輩はため息をついている。

「本当は色々と喋ってあげたいんだけどね、思えば君も同類だったかあ……残念」

「え？何の事ですか？」

「教えてあげない、ご愁傷様」

浅野先輩はそれだけ言うのと鞆を持って出て行ってしまった。いまいち何をするために此処にやってきたのかわからない。

「あ、やべ……」

体育館の方から拍手が聞こえてくる。俺はあわてて教室を後にして先輩と鉢合わせになった。

「あれ、先輩もまだ行ってなかったんですか？」

「あ、ああ……ちよつとトイレに行っていたんだ。それで遅れてしまったんだ」

「そうですね……そういうえば海外の学校に進学が決まったんですか？」

「そうだが……誰に聞いたんだ？」

「浅野先輩です。今日の朝教えてくれました」

先輩は浅野の奴めと呟いている。

「別に……別に隠していたわけじゃなかったんだ」

「いや、別にいいですよ。先輩だって三年生ですし、進路のことで大変でしょうから」

「悪いな」

「気にしないで下さい」

特に会話すると言っわけでもなく体育館についた。扉を開けて中

に入ろうとするとベルト辺りを掴まれる。

「どうかしたんですか？あ、さすがに今入ると目立ちますかね？」

「そうじゃない、今度、大切な話があるんだ。そうだな、明日の朝、悪いが生徒会室に来てくれないか？」

「わかりました」

「すまん、本当に」

「いえ」

どうかしたんだろうかと思いつつ、体育館の中へと入る。特に目立つ事もなく、俺は自分のクラスの位置へと移動し、腰を下ろした。「あれ、もう中原さんの演説終わったのか？」

「ええ、終わってしまったよ。これから異議はありませんかと進行が尋ねるところです」

中州の言った通り眼鏡の生徒会っばい女子が一字一句間違いない言葉を口にする。

「異議はありませんか？」

「ない、ないからさっさと進めると言う雰囲気は館内に広がっている。」

「はいっ」

そんな空気の中、誰かが手を上げた。声のした方を見ると田畑焔が元氣よく手を振っていた。

「えーっと……」

「田畑です。田畑焔って言いますっ。推薦したい人がいるんです」

「推薦ですか？」

「はいっ。同じクラスの新戸風太郎君ですっ」

おいおい、冗談だろうときよろきよろきしていると進行に立つよう指示された。その後、進行も混乱しているようでしきりに教師の方を見ている。

「え、えーっと、では新戸風太郎さんは壇上へ上がってください」

「わ、わかりました」

がんばれ兄貴 という声も聞こえたりして俺は何とか壇上へとの

ぼった。

「自己紹介をお願いします」

「あ、はい。二年の新戸風太郎です」

この後どうすればいいんだよと様々な顔のある館内を見渡す。すると、愛夏の姿を見つけ……その手には文字の書かれた紙が握られていた。

ここでぼーっと立っていたらあとで何を言われるのかわからない。俺はその文字を読むことにした。

「えーっと、準備が遅れてしまい、立候補はやめるつもりでした。このような形で推薦してもらうとは光栄です。飛び入りという形の為、詳しく今後のビジョンを説明できませんが一生懸命頑張りたいので会長目指してがんばりますっ……以上です」

「ではみなさん、この後は中原美奈子さんと新戸風太郎さんの決選投票ですので教室に戻ってください」

会場のざわつきも終わり、進行が俺にほほ笑んでくる。

「すごいですね、さすがは生徒会室によく出入りしていることだけはあります」

「あ、あははは……」

此処から見える景色は中原さんの俺を睨んでいるような顔ぐらいなものだ。胃に、穴が空きそうだけ。

第十八話：裏切り者の長い一日（前編）（後書き）

今回の話を読んでちょっと微妙かなと思いました。さて、今回もあとがきを忘れないうちにやっておきましょう。別に読まなくていいという方はお手数ですけど飛ばしてください。前回のあとがきでは確か、この小説の元を紹介した気がします。というわけで今回はその続き、『あらすじ：新戸風太郎は地方の大学に通う一年生。大学生になってから数日後、帰宅すると自室の布団に誰かが寝ている。そこにはどこかで見たとような下着姿の少女と、これまた同じく下着姿のおっさんが仲良く眠っていたのだった…』といった内容です。内容的にはどこにでもありそうな話ですねえ。ちょっと残念な気もしますけどインパクトに欠けたので今現在の形になってしまったのでしょうか。さあ、本編のほうはまさかの前後編。しかも新戸が生徒会長へ推薦されるといった感じに。煽りが下手？いいんです、一人でもいいからこの小説を読んで心にとどめておいてくれれば。では次のあとがきは最終回ぐらいですかね。

第十九話：裏切り者の長い一日（後編）

第十九話

クラスの雰囲気は最低最悪。これから抗争でも始まるんじゃないかと誰もが予感する空気だった。ちらつと中原さんの方を見るけど、笑ってはおらず、ただ静かに目を閉じて瞑想しているようだった。じゃあ俺もやってみようと目をつぶってみると段々うとうとしてきた……なるほど、これが悟りの境地……。

「……結果が出ました」

間延びした声で入ってきたのは田畑。くそ、俺から責められない為はどこかに逃げていたんだな…眠気も吹き飛んだぜっ。そういえば愛夏の奴も何処かにいつちまっていたし、あとでお仕置きが必要だな。

「……じゃあ結果報告お願いします」

こうなったらもう仕方がないと、中原さんが黒板を指差す。

「はいはい……えーっとな、今回はパーセンテージで表示されていたんだけど結果は引き分けでした」

「引き分け？そんな馬鹿な」

信じられないと中原さんが口を開いている。二で割り切る事が出来たんだな。

「っていうことは同数だったって事か？」

まさか俺のような一般生徒が中原さんのような存在と引き分けるとは……。こりゃ天下取りの第一歩にしたほうがいいかもしれない。

「うん、そうだよー。去年の事件とかで風太郎の名前は売れていたし、その償いって言うか、大体から生徒会にもかかわっていた事が評価されたんじゃないかなあ」

色々と言いたいことはあるが、えーと、引き分けだった時はどうするって生徒手帳に書いていたっけ。しわくちゃの生徒手帳を引っ張りだせず、中州に借りた。

「引き分けの時は…」

「今回の事について校長先生は規則に従うようにつて判断を下したから…二人とも生徒会長だね」

あった、同数の場合は副生徒会長を廃止し、生徒会長を二人選出する。とのことである。

「とりあえず決まったようだから前に出て挨拶してくれ」

先生にそう言われたので前が出る。中原さんも前に出た……その顔はどこか幸せそうだった。

「生徒会長になった中原美奈子です」

「同じく生徒会長になってしまった新戸風太郎です」

「じゃあ今日は解散だな。生徒会長になった二人は明日の朝、生徒会室に行くように。他の事は先生がやっておくから気にするな、以上」

本当にこれでよかったのかと思いつつ、席に戻る。

「すごいですね」

中州の言葉に俺も頷く。

「ああ」

「こんな事は今後起きないだろうね」

田畑もため息交じりにそんな事を言っていた。

「俺もそう思うよ…今更だけど辞退って出来ないのか？」

「辞退するときは全生徒の三分の二がうん、やめていいよと言わないと駄目だね」

それなら生徒会を続けた方が楽にも思えてくるな。というか、他の生徒は淡泊だな、中原さんに一言だけいってみんな帰ってるし。

「そういえば田畑…お前、愛夏と…」

「ああ、そういえばわたしってば用事があったんだった。じゃ、さよなら生徒会長さん」

「ちよつと待てやあつ」

ラグビー部の友人から教えてもらったそれっぽいタックル。相手に抱きつくようにしてそのまま押し倒す。

「へっへっへえ、俺が逃がすわけないだろ。さあ、吐いてもら……」
「ちよつと風太郎君っ」

せつかく田畑に馬乗り状態だった俺を中原さんが引つ張った。

「生徒会長が女子生徒にそういうことしちゃダメでしょ？」

「そうだよー、品行方正な生徒にならないと駄目なんだから。二人つきりなら考えてあげるけど」

「田畑さんっ」

「はは、冗談冗談。ま、がんばってね新戸生徒会長」

「くっ……」

反論しようとした俺の肩を中州が軽く叩き、首を振った。完全敗北である。

「じゃ、わたしは行くから」

そういつて田畑の姿は消え、白く燃え尽きた俺が残された。

「あたしたちも行くのか？」

「え？」

「あたしの家にだよ。忘れちゃった？」

「あ、ああ…そうだったな」

そういえばそうだったか。いきなり推薦されたりしてたから忘れてたぜ。

中原さんは既に鞆を持っており、中州も帰る準備が終わりそうだった。それに遅れないよう鞆をひつつかむ。

「中原さんの家か」

「きつと綺麗な家なんでしょうね」

「そうだろうな」

「うーん、普通の家だよ」

田畑の奴も来ればよかったのに。まあ、あいつがいればどんな場所でも楽しめそうだけど、もしかしたら厳格な家かもしれないからなあ。田畑ってそういう家嫌いみたいだししょうがないか。

実際に歩いてみるとそうでもない遠さだった。暑かったからちよつと遠く感じたけど雑談しながら歩いて十五分程度だ。

「このぐらいならチャリ通申請できるんじゃないのか？」

「ぎりぎり駄目だったよ」

「ふーん…」

中原さんの家は普通と言えば普通だった。実に凶暴そうな犬が寝ているだけで、後は本当にどこにでもありそうな家である。

「さ、どうぞ」

「おじゃまします」

「御邪魔します」

リビングに通されるとそこには一人の男性が座っていた。

「ただいま兄さん」

「おかえり」

「え」

「あ」

俺と中州は男性を見てキョトンとしてしまつ。そりゃそうだ。前日見かけた顔なのだ。

「やあ、昨日は御世話になったね」

「兄さんって…あなた、中原さんのお兄さんだったんですか？」

「なるほど、どおりで新戸君の名前をしかったわけですね」

「へえ、兄さん昨日風太郎君に会っていたんだ？」

「不良にやられているところを風太郎君に助けられたんだよ」

中原さんはこっちを見ていた。

「な、何？」

「ううん、変わらず喧嘩強いんだなあって思つて」

「別に喧嘩が強いつてわけでもないけど。相手は中学生だったし」

「そっか。じゃああたし、着替えてくるから」

中原さんは俺たちを残し、二階へと行ってしまった。

まあ、初対面の相手でもないの俺と中州は中原兄の前へと座る。これが初対面だったらトイレに逃亡するか、中州に話題を振るかの二択のどちらかを選択していた事だろう。

「いやー、悪いね。知っていたけど事情を説明するのが面倒だった

し、どうせあれつきりだろうと思っていたから無精してしまったよ。ぼくの名前は中原健吾だ」

中原兄は二階にも聞こえるような大声でしゃべっていた。

「ああ、君たちの名前は既に聞いているから紹介は省いて構わないよ」

「それはいいんですけど…」

携帯電話の画面が『この後、悪いけど付き合っただけで欲しいんだ。二人目の彼女のところに行っただけで別れてもらおうから』と表示されているのは何の冗談だろうか？

「どこに行くのですか」

「今日も暑いからね。男専用銭湯に行こうか？色男たちがぼくたちを呼んでいるよ」

嘘をつくのならもうちょっとまともな嘘をついてほしい。色男たちが呼んでいるってこの人、危ない人かよ。

もちろん、携帯電話の画面では『黙ってぼくに話を合わせてついてきてほしい。何でも奢るから』と表示されていたりする。

「どうするよ、中州？」

「……僕は構いませんよ。ちょうど汗もかいていますし」

「そうかあ、中州君、ありがとう」

にこにこしながら俺の方を見てくる。

「風太郎君も行くよね？」

「え、あ、はあ、わかりました」

携帯は違う事を言っている。

『美奈子は家だと凄く積極的だからね。二人つきりだと何されるかわからないよ？今日から君は弟って呼んだ方がいいのかもしれない』
こんな兄貴は嫌である。

二階に声は当然届いていたようで階段から転げ落ちるようにして中原さんが下りてきた。

「え？兄さん……風太郎君連れて行くの？」

「ああ、悪いな」

「……中州君だけ連れて行ってくれればよかったのに」

地味にシヨックを受けている中州。可哀想に……いや、お前にはジユディーちゃんがいるだろ。

「なあに、一時間もしないうちに帰ってくるよ。お昼ご飯をぼくがおごつてあげるから」

「……」

それでも不満そうな中原さんの耳元で何やら囁いていた。すると嬉しそうな顔へと変わり、ちらつとだけ俺の方を見る。何だろうか。「うん、わかった。いつてらっしゃい」

「いつてくるよ」

「じゃあおじやましました」

「御邪魔しました」

中原家を出て少しすると先を歩いていた中原兄が振り返った。

「今メールしたからね。昨日君たちといたファミレスで話をつけるよ」

「僕たちが行く必要はあるんですか？」

「ああ、結衣ちゃんが来ると大変なことになるだろうからね。事情を知っている君たちがいればぼくはその彼女と別れる事が出来るに違いない。頼むよ」

そう言われては行くしかないだろう。

中原兄の後ろを追いかけながら俺はふと考えた。

「…俺もそうだった状況になれば別れる事出来るかな」

「それはどうでしょうか。やってみないとわかりません」

「じゃあ、その時はよろしく頼む」

「いや、今回だけで充分です。きつと、泥沼になってストレスで胃に穴があくと思いますよ」

全く、他人事だからって嬉しそうに言うとは中州も悪い奴だ。

ファミレスにつき、俺たちは少し離れた場所で中原兄を見守っていた。

「どんな人が来るんでしょうかね」

「そりゃ、あの人の好みからすると太った女の人だろうよ。それ以外に考えられん。まあ、もうちょいで来るから大人しく待ってところか」

俺らが何かをするわけではないが、見届けると言う理由から五千円を支給されている。適当にメニューを頼み、二股相手が来るのを待つことにした。

数分後、入口が見える方に座っている中州の表情が変わった。珍しく、驚いているようだ。

「あの一、新戸君？」

「何だ？来たのか？」

「待つてください」

後ろを振り返ろうとしたら中州に止められる。声もいつもの落ち着いた感じではなかった。

「なんだよ？どんなすごい奴が来たんだ？」

「え、ええ…これは凄い人が来ました」

「もう首を動かしていいのか？」

「……………冷静でいてくれると約束してくれるなら」

「わかったよ。たとえ男が来ても驚かんぜ。さーて、頭に触角生えた宇宙人でも来たのかね？」

中原兄の前に座った女の人を見て目をこする。どーも、最近目が悪くなったらしい。

「……………あれ、先輩…加賀美生徒会長。いや、元生徒会長か。似てるな」

先輩に似ている人物は相手にほぼ笑んでおりどうしてあんなに慌てて呼んだのかと首をかしげている。

「似ている、というよりは本人かと思えます」

先輩に似ている人物に対し、中原兄は何やら告げていた。口だけみると『悪いけど、別れてほしいんだ』と言っているようだ。中原兄は俺と違い、ちゃんと別れ話を切り出していた。

「中州、俺たちは中原兄の二股相手を見に来たようなものだよね？」

しかし、相手はそれを信じられないといった表情で受け止めていた。泣きそうな顔で問いただしていた：俺は先輩のあんな顔を見た事が無い。でも、あれは先輩だ。

「そういうことになりますね」

「そう、だよなあ……」

「新戸君？」

俺はふらりと立ち上がり、中原兄のいるテーブルへと近づく。途中、ウエイトレスが俺を避けて通って行った。

「今はまずいですよ」

「まずい？まずいだって？何がまずいんだよ」

もう間もなく、俺は中原兄のテーブル前へとたどり着く。中原兄はそんな俺に気が付いたようでこちらを見た。そして、対面に座っている先輩も俺を見て……目を見開いていた。

「に、新戸……？」

「先輩、これは……これは……」

これはどういうことなんですか？詳しく説明してください、説明足りないのなら法廷にでも行って手続き踏んで裁判に持ち込んでやるんですから、絶対に……とかなんとか言おうとしたけどそれより早く、お冷が先輩の顔に当たった。

「この泥棒猫っ。またけんちゃんに会っていたのねっ」

「ゆ、結衣ちゃん？」

先輩は素早く立ち上がると走ってファミレスを逃げ出した。

「あ、待ちなさいっ」

結構太つていると言つのに凄く速さで結衣さんが走り出した。

「結衣ちゃんっ、待ってっ」

そして中原兄が恋人二人を追いかけてファミレスを出て行った。

「くそっ、何だよこれは……何の冗談か……負けていられるかよーっ」

俺もいても立ってもいられず、詳しく事情を聴く為か、はたまた急に走りたくなったのかわからないがファミレスを後にしていた。

「あ、あ、待ってくださいよーっ」

「お客さん、待ってくださいっ」

当然、中州も俺達についてくる……が、店員に捕まえられて駄目だったようだ。途中、客が『新車の食い逃げか？』と呟いていたのがやけに耳に残った。

ファミレスを出て追いかけてようとしたものの一度捕まると長いと噂の踏切で俺の追跡は終わってしまった。

第二十話：一時の恋の終わり

第二十話

結局、先輩を見つける事が出来なかった俺はファミレスにも戻らず、中原さんの家に戻る事もなく、自宅に戻ってそのまま眠った。

先輩と中原兄と一緒にいたのは事実。それでも俺は未だ先輩の事を信じていたりするものだから……きつと愛夏に笑われてしまうだろう。途中、ひっきりなしにかかってくる中原さんからの電話がうるさくて目を覚まし、電源を消した。その後、俺は冗談抜きで翌日まで寝続けた。

「……はあ」

朝、寝すぎたためか身体がだるかった。夏休み期間中でよかったと思う。でも、生徒会長の事について引き継ぎが何かの理由で学校に行かなくてはいけない。

制服に着替え、携帯の電源を入れる。時刻は六時半。母さんは既に出ており、父さんも既に家にはいない。あの二人は休日以外に家にいないことが多いからな。パパママとか言う歳でもないし、甘える歳でもないだろう。

「着信：127件か。結構、中原さん頑張ったんだな」

その着信の中には愛夏のものもあった。メールも相当数あり、大抵が中原さんのものだったが（どれも内容が違い、最後の方はネタが無くなってきた感がある）愛夏からのものは今日の六時半、校門前に集合というものだった。

「……間に合わないだろ」

そういつつ部屋から飛び出す。戸締りそこそこ、上半身は焦って鍵を閉め、足は学校へと行きたがっている。辺りはもうそれなりに明るく、途中走っている人とすれ違ったりもした。

予定の時刻より十分程度遅れて校門前へと着く。しかし、誰もいないようだった。

「なんだよ、時間に厳格すぎやしないか？」

無駄に走って汗でシャツがべとつく。そういえば昨日の朝食が最後だ。すごく腹が減っている……コンビニでも行くか。

立ち去ろうとしたその時に携帯電話がなりだした。この着信音は愛夏からの物だ。

「もしもし？お前いまだどこにいるんだよ」

『生徒会室だよ。昨日もメールとかしたただけど？』

「色々あつて昼以降ずっと寝ていたんだよっ」

『ふーん、そんなにシヨックだったんだ？』

「……………」

『ともかく、今すぐ来てね』

返事もできず、一方的に通話は切られる。しょうがない、ここまできたんだから予定時刻より早いが生徒会室に行こうじゃないか。

学校つてこんなに早く開いているもんなんだろうかと疑問に思ったが、普通に用務員のおじさんとかはいるようだった。まあ、生徒会室にたどりつくまで誰一人として会わなかったけどな。

一心、生徒会室という事もあつて声をかけることにした。

「失礼します」

「兄貴、おつはよー」

「風太郎、おはよう」

生徒会室の中にいたのは愛夏、田畑……そして元生徒会長である加賀美美奈子先輩だった。

「……………」

「……………」

お互い、何もしゃべることなど出来ない。俺は近くのパイプ椅子へと腰掛けた。

「で、こんな朝早くに俺を呼んで何の用だよ」

「何って、わたしたちが捕まえた生徒会長……いや、元生徒会長から今回の事を詳しく聞く為だよ」

「今回の事お？どういうことだ」

愛夏は後頭部をかきながら愛想笑いを浮かべていた。

「傷心中の兄貴には塩を塗るような形で悪いけどさ、まあ、大人しく聞いていてよ。じゃ、元生徒会長さんお願いします」

「……ああ」

先輩は決して俺の方を見ることなく喋り始めた。

「……うまく、説明する事は出来ないかもしれないが一から説明しようと思う……あれはまだ私が中学生になりたての頃だった。別にすさんでいたわけではないが、少しだけ性格の悪かった私はある日、当時の生徒会長……中原健吾さんに出会ったんだ」

「あー、そうなんすか。どうせそこで一目ぼれして……」

やさぐれる俺に田畑は蹴りを入れた。

「しっ、黙って」

「……へえへえ」

「……最初に出会ったのは偶然だったか、生徒会室前で健吾さんに出会ったんだ。彼が持っていたプリントを私がぶちまけてしまい、手伝って……それがきっかけで一緒にいる時間が長くなってきた。気が付いたら、つい姿を探してしまうような人になっていたんだ」

はいはい、そんな純愛ストーリーなんて余所でやってくださいよ。俺が目指していたような話だけど、それは俺にとって無関係と断言しているものだ。

「私は一年で、健吾さんは三年。出会って一年も一緒にいることもできず、健吾さんは卒業し、私は生徒会長になった」

「そしてお邪魔虫の俺が降って湧いたってことですか」

「別に私はお前の事をお邪魔虫とは……新戸、私と一緒に少しずさんだ生徒たちの相手をした事を覚えているか？」

「いや、そんなものもう覚えていませんね。さっさと続けてくださいよ」

田畑が何やら口出ししようと思っていたのか、俺の肩を掴もうとする。それを愛夏が止めていた。

「……健吾さんはこの高校に一カ月だけいたらしいが別居していた

両親がよりを戻したということと彼だけ単身、海外に行ったそうだ。私もそこで縁がなかったのだろうと健吾さんの事を忘れることにした。再び高校で生徒会長になり、二年になって新戸が私に告白してくれた」

「……」

もし、タイムマシンが開発されたのなら告白しに行こうとしている俺を捕まえて懇々と説得していた事だろう。絶対に告白するんじゃない、お前は酷い目に会うぞ……ってね。

「告白されたその日の放課後、もう夕日は殆ど沈んでしまった時間帯に中原美奈子という生徒がここにやってきた」

そこでちよつと首をかしげる。中原さんは何の為に先輩の元へ来たのだろうか？

「中原美奈子とは以前一度だけ会っていたのだが……何と言うか、信じられないほど私の事に詳しくかった。中原健吾は自分の兄という事、自分の言う事さえ聞いてくれれば兄との仲をお膳立てをしてやると言ってきたんだ」

「何を頼まれたんですか？」

少しだけ言うのをためらっていたようだったが、先輩はそれを静かに口にした。

「……最終的に新戸とは別れてほしい。というものだった。ああ、言葉足らずだな。簡単に言うのなら中原美奈子と新戸が仲良くなるのを手伝ってほしいというものだったよ。私は……躊躇なく頷いてしまった。あとは時折中原から連絡が入り、それを実行した。通風孔の事もあいつの考えていた事だが……そこにいる田畑さんが助けてしまったからな。何をしようとしていたのかはわからんが、失敗に終わった」

田畑がピースをしていた。俺は中指を立ててそれに応える。

「あんな、新戸」

「何ですか」

以前は先輩に声をかけられるだけで心が開放されたような気持ち

になつていた。今じゃ、不快なものにしかとらえる事が出来ない。現金なものだ。

「もし、中原美奈子から夏以降…正確には夏祭り以降にそんな申し出を受けても頷きはしなかったと思うんだ」

先輩が俺に何を伝えたいのか、さっぱりわからない。

「先輩、うるさいです。続きがあるのなら続けてください」

「……悪かった。そうだな、夏休みになってすぐに私は中原美奈子の計らいで健吾さんに会う事が出来た。私はその場で想いを告げ、健吾さんはかなり迷っていたようだが頷いてくれた」

そりゃ迷うに決まっている。あっちには結衣さんという人が既にいたんだからな。

「それ以降、たまに会って遊びに行ったよ。プールでお前を見かけたときはかなりひやひやした」

「……ああ、なるほど」

「田畑さんがお前を連れだした時はほつとした。本当に情けないな」
こんなに疲れた表情の先輩なんて見たことなかった。見たくもないね。

「それで……昨日の事が起こった。中原美奈子はその女性のことなんて私に教えてくれなかったし、居たら手を出す事もなかったと思う」

結衣という女性の存在が中原さんの計画とやりに支障をきたしたのだろうか？うーむ、まあ、今の俺には関係のない事か。

「私が今回の事について知っている情報というか……そういったものは以上だ。新戸、質問はあるか？」

「…今でも、中原健吾さんの事をどうせ好きなんでしょう？」

突如として出されたその名前に先輩は驚き、そして……そして頬を朱に染めた。

「あ、お、お前には悪いと思うが……好きだ」

完全に俺はふられた……という事か。

俺の気持ちは先輩にとって踏み台のようなものだった。だが、俺に先輩を攻める事が出来るわけもない。

俺は先輩に近づいて胸倉をつかむ。田畑が止めに来ようとしたが睨んで退かせた。

「……じゃあ今すぐにでもあの人のところに行って奪い取るとか何とかして手に入れてください。俺はもう、先輩の事なんて忘れずから。今後一切知りません…諦めるなんて先輩らしくもないっ」

「新戸……あ、ああ……わかった。お前が許してくれるのなら行って来る」

「いつてらっしやい」

生徒会室を出て行く先輩を見送ることもなく、ため息しか出なかった。

「終わっちまったか…」

「……ねえ兄貴？」

「なんだよ」

「兄貴つてば酷いね…」

ぼつりと言った愛夏の言葉が耳に入る。

「ああ？」

「え？愛夏ちゃんなんで？わたし、意外と広がった風太郎の心の広さに少しじーんときちゃったんだけど？何だか安っぽいドラマでも見てるみたい」

そういう田畑に愛夏は見下したような顔をしていた。安っぽいドラマとは何だよ。

「兄貴はさ、あの元生徒会長が絶対に中原健吾って人にふられるってわかってるんだよ」

「え？どーして？わかっていて言うなんておかしくない？」

「あれは兄貴が……」

「田畑、もうそれ以上聞くなよ。まあ、あれだ。結局二股した俺が

悪いんだよ……」

毎日が浮かれちまって馬鹿じゃないか。中原さんと先輩が鉢合わせした時の言葉とかちよつとは考えていたんだけどなあ……。

「大体、兄貴には高根の花なんだよ」

「そうだねえ、それは言えてるかも」

「うるさいつ。お前らな……俺は悲しくて泣こうとしているのを我慢しているんだぜ？ だけどまあ、結果はどうあれ二股って言う問題は片付いたわけか」

俺の言葉に対しても田畑は首をかしげていた。

「え？ もう全部終わったでしょ？ 物語は新戸風太郎の彼女が他の男に盗られたって言うしょぼい結果でさ」

「あー、そうだな。そういう事にしようか」

パイプ椅子から立ち上がる俺を愛夏は眉をひそめながら見ていた。

「兄貴、何考えてるの？」

「ん？ いや何も考えてないから安心しろよ。ほら、朝飯食いにいかねえか？」

今回の二股事件は俺が一方的に悪い。そんな俺が高校生活を無事に送ることなんてできなかつたんだろうな。それ相応の辛酸をなめさせられたし、しょうがないと思う。

携帯電話に残っていた先輩のメールアドレスと番号、メールのやり取りから写メ、記憶に残らない様にしっかりと消しておいた。

「ちよつと風太郎つ。奢ってくれるんなら早く行こうよ。あ、中州君も呼ぼうか？」

「おい、やめろよ。中州、見た目によらず食うんだからよ」

「そうだよ。これ以上人を増やすなら抜けてよ。愛夏が兄貴と一緒に朝ごはん食べるんだからさ」

傷心……か。一応こつやつて慰めてくれる（効果があるかは不明）周りがいるから俺はまだいいか。さて、今度はもう一つの方をどうにかしないとイケないのかなあ……。

青空を眺めてため息しか出てこなかった。

第二十話：一時の恋の終わり（後書き）

これまでご愛読していただいた方々ありがとうございます。今回を持ってこの『チャック全開ですよ』を終わらせたいと思います。こんな灰色決着が適度でしょう。話としては今回で終わりです。炭酸の抜けたコーラみたいになってしまいましたけど、まあ、残念な結果といえば結果ですね。大体、タイトルが作品内と今のままでは関係ないですからこれももうちょい延長していたら明かそうかとも思っていました。所詮思っているだけで形になっているわけでもありません。元生徒会長が中原健吾とかかわりがあつたように新戸風太郎も後輩とかかわりがあつたりします。本当はその人物が出てくる予定だったので結果としては出ていません。では改め今回まで続けて読んでくれた方ならびにお気に入り登録してくれた方、ありがとうございます。

第二十一話：我儘

第二十一話

元生徒会長である加賀美美奈子が暴力事件を起こし、推薦を取り消されて停学になった……という噂は誰にも広がってはいない。

そのせいで生徒会長引き継ぎとかの面倒なことは元副生徒会長である浅野先輩が一日遅れて行う事になった。

中原さんがまだ来ておらず、生徒会室には俺と浅野先輩だけだったりする。

「ねえ新戸君？」

「何ですか？」

「言いたくないんだろうけど聞いていい？」

「何の事ですか？」

「ん〜、想像付いているって思うけどなあ」

頬をつんつんつかれる。それでも俺はとぼけたい。

「さすがに浅野先輩でも聞いてきたらただじゃおきませんよ」

俺は不敵に笑う。昨日の俺と今日の俺は違うのだ。

「へえ、わたしをどうする気なの？」

「アーモンドが入っていると思って噛んだチョコの中に実はアーモンドが入っていなかったっていうシヨックに近いものを先輩に与えます」

ほんの少しだけ先輩の顔がにやけていた。

「それは嫌ねえ。じゃあ聞くのをやめておくわ」

「それが賢明です」

「すみません：遅れましたっ」

中原さんがやっていて浅野先輩は書類の準備を始めた。

「最初は慣れないから大変かもしれないけど二人で協力して行けば大丈夫よ」

「はいっ、風太郎君と一緒に頑張ります」

「適当に頑張るとききます」

「よろしい」

その後、軽く説明があつて来年度の年間行事を教師側に提出する期限の説明を受けたりした。

「じゃあ伝統だけど生徒会長と副生徒会長が引き継ぎの日に軽くこの部屋の掃除をするの。がんばってね」

「先輩はどうするんですか？」

「わたしは帰るわ。あんまり優秀じゃないから勉強しないと大学に受からないのよ。じゃあね」

浅野先輩は帰り、俺と中原さんが残される。

「二人つきりだね」

「……」

掃除箱へと放棄を取りに行く。中原さんも付いてきた。

「中原さんはバケツに水でも汲んでくるといいよ」

「え、う、うん」

その後、黙つて掃除を終える。業者でも呼んで来ないとこれ以上きれいにするのは無理だろう。

「あのさ、風太郎君：元生徒会長の加賀美美奈子って人が暴力事件起こしたたんだって。知ってた？」

口調はどこか楽しそうだった。噂を噂として楽しんでいるものではない……少なくとも、俺にはそう感じられた。

「へえー、そうか」

「幻滅だよねえ」

「さあな。俺には関係ない事だ」

箒を掃除箱に入れて立ち上がる。

「あのさ、この後二人つきりで話がしたいんだけどいいかな？親睦深めようと思つてさ」

「今だつて二人きりだろ」

「あ、そうだね。あのさ、風太郎君って加賀美美奈子の事、好きだよね？」

その質問に俺はすぐさま首を横に振った。

「なんだそりゃ？誰が言った嘘だよ」

相手は少し驚いていた。

「え？嘘？」

「え？じゃないよ。本当だよ」

「ふーん、そつか。じゃあ……」

黒い笑みを称えている彼女は俺に一步近づいた。

「あたしにキスしてよ」

「……悪いな、中原さん。事情は大体把握してるんだわ。そんな人間にキス出来るはずないだろう」

いや、ちよつと、ほーんのちよつとだけキスしようかなあなんて思ったりしてないぞ。うん、俺はこれからちゃんと中原さんに伝えなくちゃいけない事があるんだ。

「えーと、何の事かな」

「とぼけるのはやめてくれよ。俺はそういうの大嫌いだ。からかっているんなら俺は帰るよ」

「あ、ま、待ってよ」

「そっちの事情、ちゃんと説明してくれ」

「……」

黙る中原さんに俺はため息をついた。

「じゃあな、中原さん」

「あ、い、言うからっ。ちゃんとと言うから置いて行かないでっ」
扉前に中原さんが移動する。

「説明してくれ。一から、こんなバカげたことを思いついたその瞬間からな」

「……わ、わかった」

パイプ椅子に座り、中原さんは俺の対面にすわる。

「……あたしを見ても全く反応してないって事はもう風太郎君にとつては過去の事なんだと思う」

「簡単に説明してくれ」

「……う、うん。あたしは…一度加賀美美奈子さんと風太郎君に助けられた事があるんだよ」

「うーん、覚えてねえ」

改めて中原さんをみても何も思い出せない。というか、大体見たことないしなあ。照れている姿も見たことないぞ。

「そう、だよな。しょうがないよ。あたしの見た目だって変わってるしさ。中学一年ぐらいまでは太っていて眼鏡もしてたから」

「ああ、そう」

「うん。あの日もからかわれて最終的に泣いていたんだけどそこに見たことない制服の男女が二人来てくれたんだ」

「そう言えば他の中学に何かの用事で行った気がするな。ああ、思い出した。あの日先輩が注意するとか言って生徒を注意しに行ったんだ。あの人はおせっかいだ」

「多分、それであってる。格好良かったよ。颯爽と現れてあたしをいじめている不良達気絶させちゃうんだもん。そのあとすぐにいなくなっただけあたしはしつかりと覚えている」

元生徒会長である加賀美美奈子はあの時、先生を呼んで事情を説明していた。俺もそんな生徒会長をぼーっと見ていたっけな。別の用事があったてすぐに他校を後にしたけどそのあと連絡とか一切なかったから忘れるのも無理ないだろ。というか、他にも色々やったからな。

「あたしはあんな生徒会長になろうと思った」

「……そうかい」

俺もそうなるうと、あの人が憧れだった。まあ、だったって言う言葉は過去形だ。

「高校生になつて偶然風太郎君を見つけたのには驚いたよ。あたしはあの生徒会長の事を調べて同じ高校に入ったつもりだったからさ」
「近所だし、そんなもんだ。近いところに行きたかったんだよ。で、なんで先輩にあんな事を持ちかけたんだ？」

「……風太郎君が生徒会長に告白しているの……見てたんだ」

「なるほど…最悪だな」

「うん、最悪。先輩の事を結構調べていたから自分の兄弟をだしに使ったの。あたしって最低でしょ？」

「最悪だな」

中原さんはその言葉にため息をついていた。

「放課後、風太郎君を呼び出して告白してあやふやな関係以上になれるのは間違いないって思っていたよ。だって風太郎君、優しいからね」

「褒められている気がしないな」

「まあ、そうだね。だけど、加賀美さんがあたしの言葉に頷くとはちよつと意外だった。正直、悔しいけどお似合いかかって思ったんだ。でもね、先輩はためらわずに頷いたんだよ。それで、あ、この人は新戸君の相手にふさわしくないって思ってた色々頑張ったんだ」

「そうかい、色々頑張れば誰も幸せになれないわけだ。先輩、暴力事件まで起こしちゃって…：中原さんどうするんだ？」

「いいわけかもしれないけどあたしは兄さんと先輩の仲を取り持つつもりだったよ。でもさ、まさかあんな兄さんに彼女がいるなんて知らなかった」

「無知は罪だな…」

「お互いさまにね」

「何の事だよ？」

対面に座る中原さんは笑っている。

「一学期の途中から結構田畑さんと仲が良かったよね？」

「俺は元から田畑と仲がいいぜ？」

「うーん、そういうところだよ。加賀美さん、あたしに相談に来るぐらいできつとそれが彼女のためらいをごまかしてくれたんじゃないのかな？ああ、風太郎君があんなに仲良くしているのなら自分もいいかなーってさ」

これ以上話していると面倒か。俺は帰ることにした。

「あ、待ってよ。もう続き聞かなくていいの？」

「もういいよ。またやりこめられそうだ」

「あたしさ、これでも風太郎君の事好きなんだよ。何でもしていいって本当に…思ってるんだ」

後ろから抱きつかれたけど全く嬉しくなかった。

「そうかい、けど俺は遠慮しておくよ」

「なんで？」

「何だっついていいだろ」

「当てるあげようか？」

これ以上愉快なことはないと彼女は笑っていた。そろそろ怖くなつて来たぜ。

「憧れの先輩を墮としたあたしの事が憎いからでしょ？そうだよねえ？他に答えなんてないもんねえ？」

「……外れだな。俺はそこまで優しい人間じゃないんだよ」

腕を振りほどき、歩く。俺より早く歩いた中原さんは前に立ちはだかった。

「ふーん、いいけど。あのさ、もう二股じゃないからあたしと付き合ってくれない？」

「さつきも言つたる？遠慮しとくつてな。それにこれ以上面倒事が増えるのは嫌だし」

「じゃあ勝手に彼女って宣言して風太郎君に変な虫が付かないようにするよ？」

「もう勝手にしろよ」

それで中原さんは満足したのかもうつついてくることもなかった。

二学期になったらすぐにでも全校生徒の三分の二の承認を得て生徒会を辞めよう。

第二十二話：俺は先輩の事を一生、絶対に許しませんよ

第二十二話

二学期の一日目、俺は自分の家にいた。時刻は午前十時十一分二十九秒である。

「……俺もお人好しな男だよなあ」

お人好しが最終的に掴むものは大抵、幸せ……ではない。ただ他人に利用され保証人になって借金の紙をつかんだり、実際に借金をするって感じだろうな。

何故俺が登校せずに自宅にいるのか？当てる事が出来たらすごい。もし当てる事が出来たのなら近所のデパ地下案内人を引き受けてもいい。

俺、新戸風太郎は嘘をつくのが得意なのである。

「せ、先生つ。元生徒会長である加賀美先輩が暴力事件を起こしたのは俺をかばつての事なんですつ。本当は俺が原因で、先輩はただかばってくれただけなんですつ」

涙を流し、中州に証人になってもらい、先輩が暴力をふるったと言う相手（まさかのあの中学生三人組）をつれてきて証言させたのだ。元より、先輩ほど優秀な人間がそんな事をするはずがないと学校側は思っていたのだろう。なんだかんだと言って問題を起こしていた俺は担任ただ一人が反対していたようだが、先輩の罪は全て俺のものとなった。

無論、俺が先輩の事を助けただなんて本人には内密にしてもらっている。何度も確認を取ったから大丈夫だろう。

ただまあ、海外の学校の推薦は取り消されたままなので先輩はこれから他の大学を受けなくてはいけなくなっただけだな。

ああ、あと俺は生徒会長をやめさせられた。中原さんが一人生徒会長で、副生徒会長は他の人がなるそうである。まさかの田畑焔が候補の一人らしい。

俺の自宅謹慎……元は二カ月分だったそう。ただまあ、学校側の配慮で夏休み初日から既に始まっていたと言う事になりあと二週間程度で学校に行く事が出来る。

こんなバカげた芝居が通るとはちよっと思っていなかった。当然、両親が呼ばれたわけだ。両親は頭を下げて俺を家に連れ帰り、にやけていた。

「お前、何考えているんだ？」

「悪い子ね」

「あー、いや、本当だよ。僕が暴力事件を起こしてしまって迷惑かけてごめんなさい」

愛想笑いを浮かべる俺に親父は一発チヨップをくれて、母ちゃんの方はお小遣い三カ月停止を言い渡した。

愛夏には直接「窓ガラスをふざけて割って停学を喰らった」と説明しており、田畑には中州を通じて「雑巾野球をしていたら窓ガラスを割ってしまった」と説明してもらっている。中原さんにもその程度の説明がされているだろうし、先輩にいたってはもう縁を切ったと言ってもいい。

完璧、完全な布陣である。反省文も「真実を話してくれた」という事でたったの二枚というこの少なさ。夏休みの友を二日で終わらせた俺には敵ではなかった。

「あー、暇だ」

携帯電話を取り上げられている為、誰かにメールを送る事も出来ないが面倒な返答をする必要もない為、いいかもしれない。

やりつくしたゲーム、何度も読み直した漫画、ラブコメのちよとしたラノベももう飽きた。んじゃ、愛夏の置いて行ったどろどろの小説を読むのかと聞かれるとそれも嫌である。

強制的引きこもりとなった俺は将来引きこもりになる事はないだろう。

この時間帯に誰かが遊びに来てくれるわけでもないし、学校側の特別調査委員（中州調査員、田畑調査員）が夕方ぐらいには来てく

れるからまだましか。

そんな時、ぴんぱーんとインターホンが鳴りだした。

「はいはい」

どうせ聞こえていないだろう相手にそう返事して俺は玄関へと赴く。どうせ昨日のような訪問販売の女性だろうけどパンツ一丁で扉を開けてウエルカムしたら逃げ帰ったからな。まさかあとで穴が開いていたとは思いつかなかったけど……もう二度と来ないだろう。「どちら様ですか？」

「……」

相手は無言、チャイムを一度鳴らした。うーん、怪しい。もしかして昨日の姉ちゃんが復讐しにやってきたのだろうか？ならパンツも脱いだほうがいいかもしれない……いや、警察を連れていたら俺はどうすればいいのだろう。

家の中だし、大丈夫か。

こういう場合はどうすればいいか。

とりあえずチェーンのまま扉を開ける。何かに、いや、誰かに扉がぶつかった。

「いたっ」

「あ、すみません先輩……」

これはもう条件反射。知っている声、以前とっていた態度がまるまる出てしまった。

「出鼻を挫くとはやるな、新戸」

「帰ってくださいっ。もう先輩の事は忘れたんですっ」

俺はさっさと扉を閉めようとする……が、相手もドアノブをひねり、引っ張ってくる。

「うおっ」

女の子のそれとは思えない恐ろしい力、慌てて両手で握りしめる。潜在的な俺の直感が扉を隔てた向こうの相手が強敵だと俺に教えてくれた。

「な、なんだこのプレッシャーは……」

額に汗を浮かばせながら俺は踏ん張る。でも、駄目だ。徐々に扉の隙間は大きくなっていく。

引きこもりたい……

そんな心の声が俺に力を与えてくれる。でも、異界との扉は徐々に開かれて行ってしまい、相手はそこに指を挟んできた。

「新戸、お前に扉を閉める事が出来るか？」

「……くうっ……」

結局、俺の負けは時間の問題だったのだろう。だって、片手で俺と張り合っていたようだからな。こっちは両手だぜ？この人本当に人間かよ。

「わかりました、俺の負けです。ちゃんと開けますから手を離してください」

「…信用できないな」

「あのですねえ、ちゃんと信用してくださいよ。俺は先輩の…」

「先輩の……なんだ？」

「何でもないです」

先輩が手を放したようなのでチェーンを外し、ちゃんと扉を開けた。

「……本意じゃないですけど、どうぞ」

「邪魔する」

先輩をリビングに通し、お茶を出す。

「どうぞ」

「悪いな」

「それ飲んだら帰ってくださいよ。俺、忙しいんですから」

「用事が終わったら帰る」

先輩はちびりちびりとお茶を飲んでいる。俺はいらいらし始めた。

「先輩、俺の家にわざわざお茶を飲む為に来たんですか？」

「お前、これまでと態度が違うな。私に好かれる為に、尻尾を振っていたのか？」

「はあ？そんなわけありませんよ。俺はずっとこうです。別に先輩だから先輩に対してちゃんとした態度を取ってきただけですよ」

「そうか、それなら……先輩の起こした不祥事を後輩が責任取るのもそういう態度ということか？」

いきなりテーブルを叩きつけるものだからつい、変なポーズをとってしまった。

「いきなり怒鳴らないで下さいよ」

「お前が余計な事をするからだ。前に座れ」

立っていてもしょうがないので前に座る。べ、別に先輩が怖いから座ったわけじゃないんだぜ。

「しかし先輩が中学生に手を上げるとは思いもしませんでした」

「ああ、そうだ。私はそんな女だ。何せ、二股するぐらいだからな」
これほど不機嫌そうな顔は見た事がない。う、うーむ、ここは冷静になったほうがいいんじゃないだろうか。

「それで、なんであんな事件を起こしたんですか？」

「お前のせいだ」

「俺のせいですか。はいはい、まあ、それなら俺がこうやって自宅謹慎くらっているのはいいんじゃないんですかね」

「……あくまでお前は要因で、実際に暴力をふるったのは私だ。自制できなかったのは私の責任だ」

ふんぞり返って腕を組む。俺はため息しか出なかった。

「相変わらず堅苦しい考えしているんですね」

「新戸、これまで私の事をそんな目で見ていたのか？やはり媚びへつらっていたんだな」

「へえへえ、そういう事でいいですよ。俺はどうせお邪魔虫ですか」

しかし、先輩は何をする為に此処に来たのだろうか？俺が自宅謹

慎になつてゐる事もどこで聞いたのだろう……俺の住所だつてたしか知らないはずだ。

「先輩は中原さんのお兄さんにまたふられてそれで中学生に襲いかつたつて事ですか」

「または余計だな……」

不愉快そうに眉を動かす。

「そりやしません」

「すみません、だ。まあ、いい。私はお前に励まされてすぐに健吾さんの元へと走つて行こうとした……だが、途中ではやる気持ちはお前に対しての怒りに変わったんだ。それがあの結果だ」

「は？」

先輩は立ち上がり、俺の近くへとやつてくる。何故か、本能的に椅子から少し腰を浮かせて逃げる準備をしてしまった。

「私がお前を呼ぶときは大抵、一人で来るが……偶然校内で見かけたとき、あつた時は女の子と一緒にいた」

「先輩、中州は男ですよ」

「うるさい、そんな事は知っている。拳句、なんだ……私はお前と健吾さんに二股をしてしまった後ろめたさに毎日苦しんでいたのに……」

生まれて初めて、先輩に対して恐怖心を抱いた。先輩と対峙してきた人たちは足が震えていたもんだが……きっと今の俺もそうなのだろう。

「あのかな、新戸」

真正面から俺の事を見てくる。

「な、何ですか？何かあるなら早く言つてくださいよ」
相手のペースに乗せられては中州達に笑われてしまう。

「キスというものは恋人同士がするものだ。友達同士がするものじゃない。お前、田畑焔にキスしていただろう？」

一瞬だけあの場面が蘇る。

「あ、あれは別に俺がしたつてわけじゃないですよ」

「それにだ、親戚の新戸愛夏にもキスした事があるそうだな？変態め」

うぐ……幼少の傷を先輩につつかれるとは思ひもしなかった。

「あつちはまだ子供だったから見逃してください」

「わかった……だが、おかしくはないか？」

「何がですか？」

先輩がその事を知っていること自体、おかしいことだ。愛夏め……

あいつ俺が学校にいないからって何かやらかしたに違いない。

「お前、一度も私に対してはキスして欲しいなんて言わなかったな」

「そりゃ……いきなりキスして欲しいなんて言えないですよ。そう

いうのって徐々に仲良くなってるもんじゃないんですか？」

「してほしいって素振りも見せなかっただろう？」

「……いや、それはそうですよ。それは先輩の方がおかしいです。

一体、先輩は何が言いたいんですか？」

先輩は俺に顔をぐつと近づけてキスしてきた。

「私と付き合え、これは命令だ」

啞然としていたが、俺は負けはしない。

「せ、先輩のような二股する女の人とはもう付き合いたくありませんっ」

傷つけてもいいから出ていってもらいたかった。心の奥底の金庫にしつかりと南京錠でかけ、セメント漬けにして太平洋沖に沈めた思いをまた出してしまったら面倒だからだ。

しかし、傷ついて引いてくれるだろうと思っていた俺はアマチャゃんらしい。

「三股していた男がそんな事を言うのか？」

「さ、三股……俺は別にそんな事してませんっ」

「このまま私が出て言ってもいい」

「じゃ、じゃあ出ていってくださいよっ」

先輩は意地悪そうな顔を俺に向けていた。

「ただ、そうするとお前は学校に来ても『親戚にキスをするような

変態』、『友達の子の女にいきなりキスをする変態』と呼ばれるだけになるぞ。拳句、『二股した男』という事でも有名人になる事が出来るだろうな」

その時、俺の中で何かのはじけ飛んだ。

「あーもうっ。先輩、俺がどんな気持ちで先輩をあの時送り出したかわかっているんですかっ」

「さあな？」

「さあな？じゃありませんよっ。泣きたいけど泣けない状態で送り出したんですっ。こっぴどくふられてこいやあゝって感じで送り出したんですっ」

「そうか……で、私に対しての答えはどうなんだ？」

「……やりますよ」

「ちゃんとやってくれ」

俺はため息をついてしっかりと立ち上がる。そして、迷うことなく先輩の目を見て言う事にした。

「俺は先輩の彼氏になります……これでいいですよね？」

「さすが新戸だ」

満足そうに先輩は頷き、目をつぶった。

「あの、何してるんですか？」

「キスしてくれ。他の女にキスした回数で負けるわけにはいかん」

「……先輩、そう言うのはいないと思います」

「うるさい、やれ」

先輩も何か吹っ切れたんだろうな……まあ、後輩としては先輩の言葉に従うしかないだろう。

俺は先輩を軽く抱きよせてキスした。

「これでいいですよね？」

相手の目をしっかりと見る事が出来ず、ついそらしてしまう。

「ああ、満足だ。用事は済んだ、私は学校に帰るよ」

「そうですか」

「これから進路のことについて担任と話すよ。進路が決まったら今

度はお前に一番に教えるよ」

「……はい」

先輩を玄関まで見送り、俺は手を振る。

「じゃあ、いつてらっしやい」

「行って来る。なあ、新戸」

「何ですか？」

「私はお前の事を一生許さない」

どきつとした。

「え？」

「だから、お前も一生私の事を許さないでくれ。私の事を忘れたなんてもう言わないで欲しい」

「…はい、俺は先輩の事を一生、絶対に許しませんよ」

「ありがとう」

許さないって言っているのにお礼を言うなんて変な人だ。

これから数日後、先輩が浮気をしていると勘違いして俺の部屋に居座るようになったのはまた別の話である。

〈終〉

第二十二話：俺は先輩の事を一生、絶対に許しませんよ（後書き）

毎度、完結させるたびに思うことがあります。なんで自分には文才がないんだろうかと。文才ってどこに行けば売っているんですかね？売っている人がいるのなら教えてほしいものです。もうちよい文才ある人ならうまく完結させることができるだろうなあって思うんですよ。それと、もうひとつ。新戸風太郎は不幸になってしまえばいいんですよ。不幸に不幸に考える、でも、こうなってしまった。これもまた、残念な結果です。ええ、本当に心の奥底から残念です。今回の結末に不満をもったとかそういった苦情は一切受け付けません。ではまた、どこかで会いましょう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4875x/>

チャック全開ですよ

2011年10月31日20時05分発行